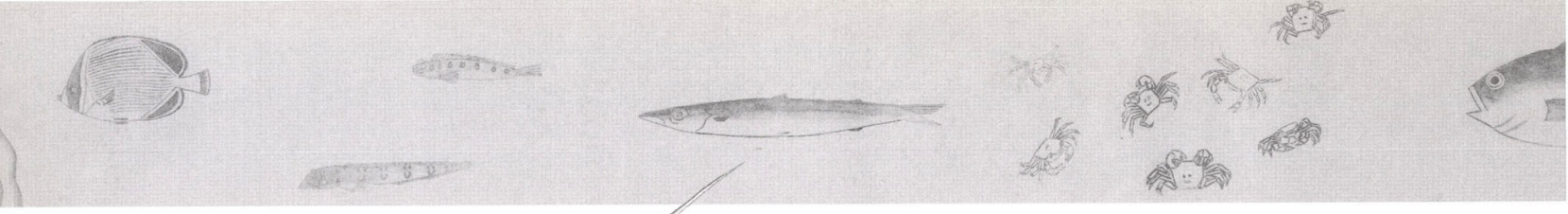
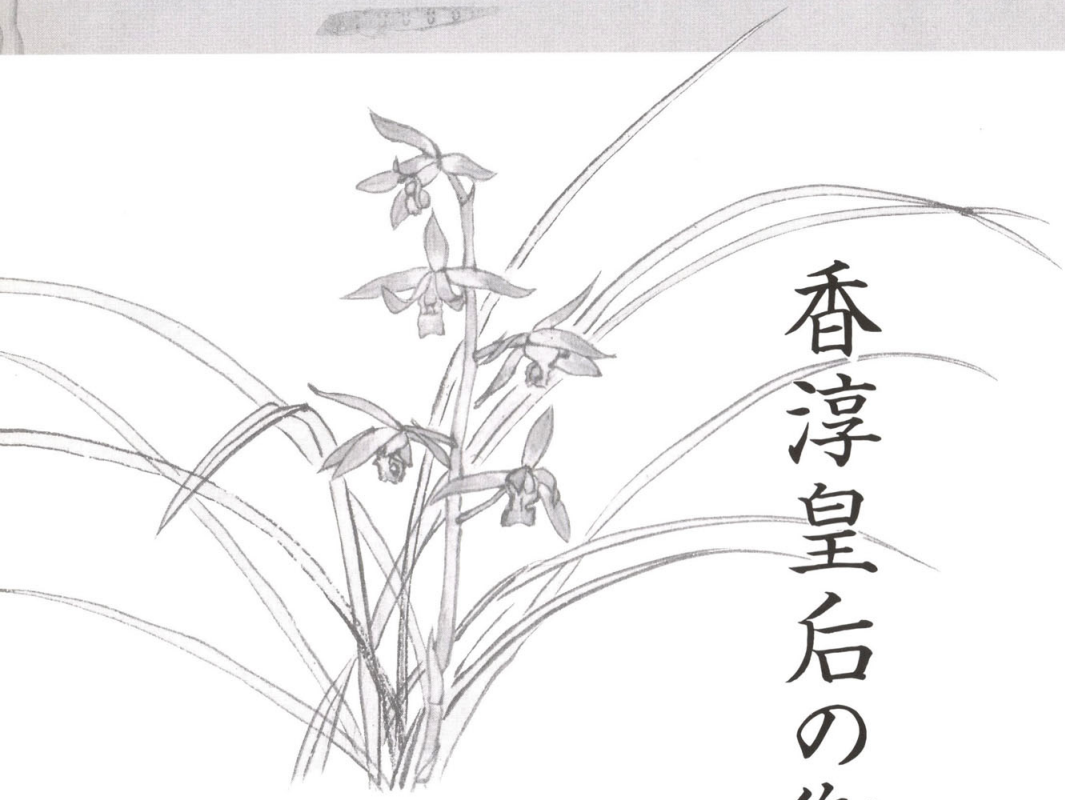
香淳皇后の御絵と画伯たち



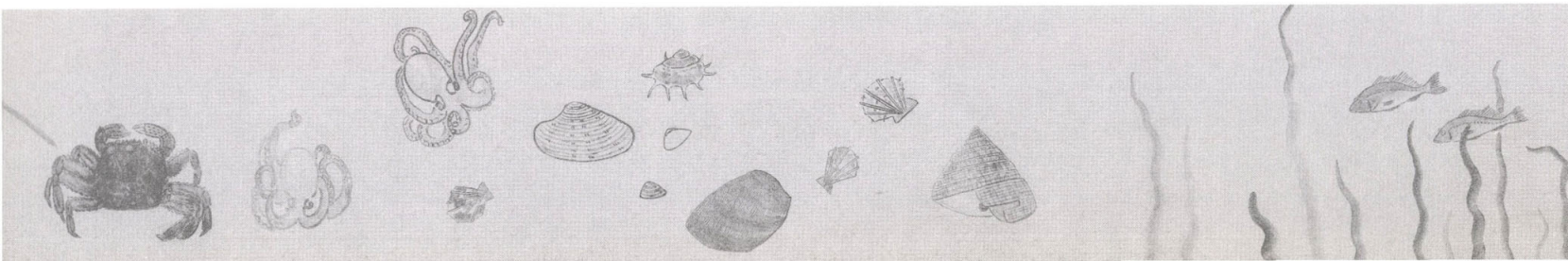


香淳皇后の御絵と画伯たち

平成19年3月27日(火)～6月17日(日)

前期：3月27日(火)～4月22日(日)
中期：4月28日(土)～5月20日(日)
後期：5月26日(土)～6月17日(日)

宮内庁三の丸尚蔵館



目次

3――ごあいさつ
4――皇后さまと絵　前田青邨
8――香淳皇后の御絵
12――香淳皇后御写真 ―絵を楽しまれた日々
18――香淳皇后の御歌より
19――香淳皇后の御絵
59――香淳皇后と画伯たち
97――主な参考文献
98――出品目録
iv――List of Exhibits
iii――Paintings by Empress Kojun
ii――Foreword

凡例

一、本図録は、平成十九年三月二十七日(火)～六月十七日(日)を会期とする展覧会「香淳皇后の御絵と画伯たち」の解説図録である。

一、図録に掲載する図版の番号は、展示番号と一致する。なお、展示作品中、展示番号73は、展示番号72と近似する作品であるため、図版を割愛した。

一、会期中、展示替を行う。

一、この図録において、図版頁は、作品の展示番号、題名、制作年代のみの記載とし、寸法等は作品リストに掲載している。

一、本展覧会で展示する作品のうち、香淳皇后の御絵は、両陛下お手許品および御物で侍従職の所管である。他は三の丸尚蔵館、及び用度課所管で、その詳細は、作品リストに掲載している。

一、本展覧会の企画及び概説、作品解説等の執筆は、三の丸尚蔵館学芸室主任研究官・太田彩が担当した。

一、図録掲載の写真は、侍従職から提供を受けたほか、佐藤洋一、幸阪勉、天沼儀朗、鈴木達弥(株)コニカミノルタホールディングス)の撮影による。

ごあいさつ

香淳皇后は，日本画家の高取稚成（一八六七～一九三五），川合玉堂（一八七三～一九五七），前田青邨（一八八五～一九七七）に日本画の指導を受けられ，多くの絵画作品を遺されました。高取画伯には，皇室に入られる前，久邇宮家にいらした折から指導を受けられ，特に大和絵の基礎的な技法を習得されたようです。川合画伯からは昭和十年代末頃から指導を受けられ、自然の描写について多くのことを学ばれたようです。さらに昭和三十四年からご指導に当たった前田画伯の率直な意見に基づいて，絵のバリエーションを広げていかれました。こうした香淳皇后の御絵について，多くの人が，気品の高さ，大らかさが自然と滲（にじ）み出ていると語っています。また，御自身が絵を創り上げることをとても楽しんでいらしたことは，様々な作品の中に感じられる温かさ，愛らしさからも看取できます。

今回の展覧会では，香淳皇后の御絵と共に，日頃お身の周りで親しまれた三人の師の作品や，これまで紹介されなかった他の画伯とのご親交の様子も紹介します。絵の創作を楽しまれた香淳皇后のお姿と共に，画伯らとの温かいやりとりの一端を，作品の数々を通して感じていただければ幸いです。

平成十九年三月

宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵　出品作品一覧　（第43回　香淳皇后の御絵と画伯たち）

作品番号	作品名	作者名	員数	時代	ページ
7	八重桜下絵	香淳皇后	二枚	昭和33年か（1958か）	p. 24
9	菊桜下絵	香淳皇后	一枚	昭和33年頃か（1958頃か）	p. 25
64	色紙(童子奏楽・蛇篭図)	高取稚成	二枚	大正～昭和初期（20世紀）	p. 60
65	赤坂離宮御苑（春）	高取稚成	六曲一隻	昭和3年（1928）	p. 61
66	色紙(牛・兎図)	川合玉堂	二枚		p. 62-63
67	杜若に白鷺	川合玉堂	一幅	大正6年（1917）	p. 63
68	渓山晩晴	川合玉堂	一幅	昭和18年（1943）	p. 64
69	風景図	川合玉堂	二面		p. 65
70	風景図（深山渓谷）	川合玉堂	一幅		p. 64
71～75	植樹祭	川合玉堂	一巻	昭和23年（1948）	p. 66-68
76～83	植樹祭、「水声鳥語」習作ほか	川合玉堂	八枚 （二十二枚のうち）	昭和20年代	p. 69-71
84	初雪	前田青邨	一幅	昭和36年（1961）	p. 72
85	馬頭	前田青邨	一面	昭和46年（1971）	p. 73
86	樹木	前田青邨	一面	昭和40年代	p. 73
87	富士	前田青邨	一面	昭和40年代	p. 73
88	あざみ（素描）	前田青邨	一面	昭和40年代	p. 74
89	桜図素描	山口蓬春	一枚	昭和16年頃か（1941頃か）	p. 76
90	花菖蒲（素描）	山口蓬春	一面	昭和20年代中頃	p. 77
91	菊（素描）	山口蓬春	一面	昭和20年代～30年代初	p. 77
92	秋意	山口蓬春	一幅	昭和37年（1962）	p. 75
93	山中湖より	奥村土牛	一面	昭和53年（1978）	p. 78
94	牡丹（素描）	奥村土牛	一面	昭和53年（1978）	p. 79
95	牡丹（素描）	奥村土牛	一面	昭和40年代～50年代	p. 79
96	桜図色紙	跡見玉枝	五枚	大正～昭和期（20世紀）	p. 80-81
97	桜図屏風	跡見玉枝	二曲一隻	昭和7年（1932）	p. 82-83
98	雨霽	竹内栖鳳	一幅	大正13年（1924）	p. 84
99	菊花	横山大観	一幅	昭和3年（1928）	p. 85
100	雪月花	上村松園	三幅対	昭和12年（1937）	p. 86-87
101	朝陽群鶴・月下群鴎図	西村五雲 西山翠嶂	対幅	昭和3年（1928）	p. 88
102	千代田城	堂本印象	一幅	昭和14年（1939）	p. 89

103	画帖「景雲餘彩」より	前田青邨ほか	六図	大正11年（1922）	p. 90-91
104	画帖「瑞彩」より	高取稚成ほか	八図	大正13年（1924）	p. 92-94
105	画帖「光彩」より	奥村土牛ほか	四図	昭和61年（1986）	p. 95-96

香淳皇后の御絵

香淳皇后は、明治三十六年（一九〇三）三月六日、久邇宮家に御誕生になった。父は邦彦王、母は俔子妃である。久邇宮家は、伏見宮邦家親王第四王子・朝彦親王より始まる宮家で、邦彦王は第二代、香淳皇后はご長女で、御名を良子と申し上げる。

良子女王が皇太子妃に内定したのは、大正七年一月十四日である。この時、良子女王は十四歳、裕仁親王は十六歳であった。この後、御結婚されるまでの六年間、良子女王は久邇宮邸内に設けられた御学問所でさまざまな研鑽をつまれた。日本画の本格的な御修業はこの御学問所において、大和絵画家の高取稚成（一八六八～一九三五）に学ばれて以後のことである。

大正十三年一月二十六日に御結婚され、三年後には昭和と改元され、皇后としての忙しい日々を迎えられた香淳皇后が、どの程度、御絵に取り組まれていたかについて、それを知る資料はないが、おそらくは、高取画伯の絵を模写しながら学ぶ方法ではなかったかと考えられる。後に制作された御絵を拝見すると、絵具や筆の用い方とそれらによる様々な表現方法といった日本画の基礎的なことは、この時に習得なされたものと考えられる。しかし、御結婚の後、間もなくに御子様方が次々と御誕生になり、また皇后としての多忙な日々を過ごされる中、昭和十年には高取画伯が急逝したこともあり、しばらくは絵の御修業の時間は少なかったのではないかと思われる。

絵の御修業を再開されたのは、昭和十九年の春、川合玉堂（一八七三～一九五七）の指導を受けられてからである。しかし、時局は次第に悪化し、昭和二十年八月の終戦を迎えて、絵の修業は中断されることとなった。再開されたのは、二十年代半ば近くになってからであろうか。奥多摩に疎開して、そのままその地に居住した玉堂画伯との間を、侍従が絵を運び、それに対する批評を受けての御修業であった。手本は描かず、「手本は大自然あるのみ」と言い続けた玉堂も昭和三十二年六月三十日に他界。その一年ほど後に、前田青邨（一八八五～一九七七）がご指導に当たることになる。青邨画伯の指導を受けられた昭和三十年代から昭和四十年代にかけてが、最も意欲的に御絵を制作された時期である。

香淳皇后の御絵の御制作は、皇居内でも行われたのはもちろんであるが、葉山や那須の御用邸に滞在された時に描かれたものが多い。皇居内では、諸行事のため、まとまって制作される時間が少なかったが、葉山や那須では、御静養の合間に、昭和天皇と共に、植物や魚貝類の観察をされ、写生をなさり、それを絵に描かれる比較的ゆったりした時間をお持ちになることが出来た。また、国内外の御訪問の際にも、写生のための用具をお持ちになって、時間を見つけては写生をされた。その題材は、植物、鳥、魚貝を中心に、風景、静物に及ぶ。ただ、早い時期は、大和絵を修業されたこともあって、古典的な画題の大和絵を随分と描かれているようで、その成果の一つが、昭和三十二年の御作「枕草子絵巻」（展示番号5）である。

こうした香淳皇后の御絵は、昭和三十一年秋に、宮内庁職員の文化祭に初めて三点の御絵が出品されて以降、毎年出品され、昭和四十二年には初めての画集『桃苑画集』（限定三百部の非売品）が刊行された。その後、画集は昭和四十四年に『錦芳集』、平成元年に増補新訂『錦芳集』が出版されたほか、昭和四十八年九月には東京上野の日本芸術院会館で、翌四十九年三月には京都国立博物館で、さらに五十年十月には愛知県美術館で「皇太后さまの絵と書展」が開催され、書も含めた約六十点が公開されて好評を博した。また、昭和五十年、昭和天皇と共に訪米された折には、ワシントンとニューヨークで「御物展」が開催されたが、古美術品に加えて、香淳皇后の御絵も特別出品された。こうした公開の中で、香淳皇后の御絵に身近で接した画伯たちはもちろん、多くの人々がそのおおらかで気品のある作品に魅了された。巻頭に掲載させていただいた前田青邨画伯の文中にも「・皇后さまのお作は、堂々としていること、たっぷりしていること、こせこせしていないこと、そのものの姿を描こうとして四つに組んでいらっしゃること、いつでもこういうことを感じる。・」と記されており、青邨画伯に学ばれた平山郁夫画伯も、青邨画伯が話された言葉として「皇后様の作品は、とても画品が高いものだが、これはきっと生来のものでしょう。」と記されている〈「皇后陛下の日本画」（増補新訂『錦芳集』所収）〉が、こうした記述が、香淳皇后の御絵の魅力を十分に語っている。

現在の私たちが香淳皇后の御絵を拝見しても、描かれているものの表情が実に良い、その描写対象の持ち味、表情のとらえ方が実に上手いと感心させられる。青邨画伯もそうした良さを絶賛されている。本図録の後半「香淳皇后と画伯たち」の中で、師である川合玉堂画伯、前田青邨画伯、そして交流のあった山口蓬春画伯から、写生ということの大切さ、面白さを学ばれたことを紹介しているが、絵の制作に対しては、御自身、厳しい姿勢で努力を積み重ねられたことにより、自然と画格も高まり、天性の優れた感覚も伴って、無心から生み出される自然な表現が、香淳皇后の御絵には十分に表れているのである。

今回の展覧会では、こうした香淳皇后の御絵を紹介すると共に、師の画伯

や、交流のあった他の画伯の作品を通して、御絵の背景や、周囲との温かい交流の様子を紹介しようと考えているが、何分、当時のことを知る人が少なくなった現在、作品以外には、文献資料が大きな頼りである。資料としては、前述の画集、展覧会図録に寄せられた画伯等の文章のほかに、入江相政元侍従長の記された日記、随筆類がある。特に『入江相政日記』全六巻（入江為年監修、朝日新聞社編、一九九一年）は、昭和十年から昭和六十年までの実に半世紀にわたる長き日々を綴ったもので、香淳皇后と御絵についてもその変遷の様子をうかがい知ることが出来る。そこで、ここでは、この入江元侍従長の日記（以下『日記』）を追いながら、香淳皇后の御絵の制作の様子を紹介していきたいと思う。

◇

入江相政は、明治三十八年六月、入江為守（貴族院議員、子爵）の三男として誕生。学習院から東大文学部国文科に学び、卒業後は学習院の教壇に立っていたが、昭和九年十月より侍従として、昭和天皇のお側に仕えることとなった。父為守も昭和天皇の皇太子時代に東宮侍従長を、後に貞明皇后の皇太后大夫を務めた。為守は、もともと藤原定家を遠祖に、代々、歌学をもって朝廷に仕えた冷泉家の出で、歌学に優れ、宮内省御歌所の御用掛や所長を務め、大正大礼の際の悠紀主基屏風の主基地方の和歌、昭和大礼の際の悠紀地方の和歌を詠んでいる。

相政は、昭和四十三年四月に侍従次長、翌年九月から侍従長を務め、退官を目前にした昭和六十年九月二十九日に急逝、八十歳であった。

◇

『日記』に御絵との関連で最初に認められる記載は、昭和十七年十二月十三日、文末の「（受信）：川合玉堂氏」で、それ以上の具体的な記載はない。しかしこの記載は、翌年と結び付くようで、昭和十八年一月三十日（土）に、「午后：仮御所へ玉堂の席画を陪覧に行かうといふことになる。急いで行く。丁度間に会ふ。東宮様の御前、玉堂老画伯が一点一線もいやしくもせずに揮毫してゐる姿は実際美しいものであった。鶴、馬、鶏、虎、猫、水仙、山水二枚の合計八枚。非常に御満足の御模様であった。」と記される。さらに四月十日（土）には、「午后一時半両陛下呉竹寮に成らせられる。照宮御卒業御祝の御催。一時半より一時間川合玉堂氏席画。：」とある。その後、四月十五日（土）にも「午后仮御所へ行く。父上が大宮様の御為に御用意になった御絵の御道具一式を御頂戴になったのゝ御使初。あと席画四枚。」。そして四月二十七日（木）、「皇后宮は今日始めて川合玉堂氏を召されて御絵の御稽古。皇子御殿で遊ばす。二時一寸過頃からお始まりで五時頃までおかゝり。以外に長かった。玉堂さんを送り乍ら帰る。」と記される。この四月二十七日が、御修業再開の初めであろう。

川合玉堂と入江元侍従長は、昭和大礼の際の悠紀地方屏風において、父為守が和歌を、玉堂が絵を担当したこともあって、かねてより懇意であった。両家は家が近かったこともあって、相政は、幼い頃に玉堂宅に遊びに行っていたという。そうした縁から、香淳皇后が「長い中絶の後、また描きたいとおっしゃるので、玉堂に批評して上げるように頼んだ。」＜「川合玉堂」（『いくたびの春―宮廷五十年』所収）＞のだそうだ。この時期が、昭和十七年の終わり頃で、昭和十八年に入って、玉堂が皇居へ参内して、御前揮毫を行い、そして香淳皇后の絵の指導をすることになったと見られる。同書によれば、その後、玉堂には、昭和十九年の初夏頃に、五、六回、皇居に出てもらい、指導に当たってもらったということである。

しかしその後、戦況の悪化で玉堂は奥多摩に疎開してしまい、終戦後の混乱期、そのまま、香淳皇后の御絵の制作は中断してしまった。次第に世の中が復興し、昭和天皇、香淳皇后の御日常や諸行事も少しずつ再開されていく中、昭和二十三年四月四日、青梅市永山公園で植樹祭が行われ、昭和天皇と香淳皇后が行幸啓された。そこへ出かけていた川合玉堂を香淳皇后がお見かけになってお声をかけられる、ということがあった。玉堂は、そこで下賜された紙に、お手植えの桧などを描き、和歌を詠んで返礼とした。その作品が展示番号71～78である。また、『日記』によると、この年の十月二十五日（月）には、当時の日本画壇を代表する画家を仮宮殿に招いて歓談されたことがある。この時に集まったのは、上村松園、横山大観、松林桂月、西山翠嶂、安田靫彦、鏑木清方、前田青邨、川合玉堂、野田九甫、福田平八郎、奥村土牛、中村岳陵、小野竹喬といった面々。香淳皇后には馴染みの画伯も少なくなく、こうした出来事は、香淳皇后が再び御絵を制作されたいという意欲をかりたてたことであろう。

『日記』に「皇后様のお絵」という言葉が、戦後、初めて記されているのは昭和二十五年二月十七日であるが、具体的なことは何も書かれていない。昭和二十七年に入って、八月七日（木）に「工藤さんやら田中親美さんに電話して明日のことを約束する。」とある。この明日のこと、というのは注記によれば、「翌八日の皇后執筆の絵巻物のこと」らしいが、残念ながら『日記』にこの八日の記事が掲載されていない。ただ、ここに登場する田中親美（一八七五～一九七五）は、「平家納経」等の文化財の復元複製事業に功績を遺した画家で、「源氏物語絵巻」の復元模写も行っていた。この前後に『源氏物語』について御進講等の関連記事が多いことや、時期的にみて、香淳皇后がその制作を行われていた隆能源氏、つまり徳川美術館等に所蔵される国宝の「源氏物語絵巻」の模写についての記事であろうと推察される。

また、『日記』昭和二十七年十二月五日(金)には「皇后様から明日の玉堂さんの所へ行く御用をうかゞふ。」とあり、翌日には「川合さんの所へ行く。：午后から御絵を画室で拝見してもらふ。三時一寸過に終る。：七時半に御文庫へ行き：御前に出る。鶏と薔薇と烏瓜の御絵。最後のは御自身で工夫あそばしたもの。これがやはり一番およろしかった。」と見え、本格的に絵の制作を始められて、玉堂とやりとりが行われている。また二十八年には、十二月十二日(土)、葉山の御用邸にて「夕方御展望室に出たら皇后様がお絵を遊ばしてゐた。」とあり、二十九年九月九日(木)には、玉堂の所へ行き、「画室で皇后様の松虫草と竜胆。前者は問題なし。後者についていろいろ批評あり。」と記され、昭和二十七年以降、ほぼ、本格的に御絵が再開されていたことがうかがい知られる。

昭和三十一年は、十一月二十八日から開催された宮内庁職員総合美術展(文化祭)に、初めて御絵三点が出品された年である。作品は、「鷺草」(展示番号1)、「岩たばこ」、「泰山木」(展示番号2)の三点であった。この年には櫨と蚕の御絵も玉堂が拝見してご指導があった(『日記』昭和三十一年十二月二十日)。ところが、御絵が本格的になってきた矢先の三十二年六月三十日、川合玉堂が亡くなった。『日記』には、この年の御絵として「海芋」「凌霄花」「櫨」が記されている。しかし、この年、香淳皇后はまた別の御絵にも挑戦されていた。最初の師、高取稚成の描いた「枕草子絵巻」の模写である。昭和二十九年の御歌に「絵巻物」と題し、「なつかしき師のふであとの絵巻物まきかへしつつたびかさね見つ」と詠まれた和歌がある。この御歌に詠まれた作品こそが高取稚成筆の「枕草子絵巻」である。この絵巻がどういう事情、経緯で香淳皇后のお手許にあがったのかを知る資料が見あたらず、この絵巻の所在も明確ではない。この絵巻は現在まで世には知られていないのである。その絵巻を香淳皇后が御覧になり、模写された作品の一つが今回展覧会に初めて公開することとなった「枕草子絵巻」(展示番号5)である。「枕草子絵巻」は、鎌倉時代、十四世紀の制作と考えられている白描の古い絵巻があるが、この絵巻に現存するのは七段だけで、しかも、香淳皇后が模写された場面、第二七八段は、この古絵巻にはない。高取の絵巻は、古絵巻に基づいたものであったのか、彼の創案によるものであったのか、確認出来ないのは残念である。『日記』昭和三十三年三月六日(木)、この日は香淳皇后の御誕生日であるが、「皇后さまは昨夜で枕草子の高取さんの絵のお写しもすつかりお済みの由。」と記されている。御歌からこの時まで、香淳皇后は高取の絵巻を、師を懐かしみつつじっくり御覧になり、数年をかけて模写して仕上げられたようである。

そして、この年、新しい師が決まった。『日記』三十三年四月一日(火)、「：北鎌倉の前田青邨の所へ行く。皇后さまのお絵の御指導をする事についていろ〳〵話し快諾してもらふ。」。入江元侍従長の他の記述や、侍従として共に昭和天皇、香淳皇后に仕えられた徳川義寛元侍従長の記述によれば、青邨画伯が香淳皇后の御絵のご指導にあたられたのは昭和三十四年と記されているので、実際に青邨画伯が指導に当たられたのは承諾されてしばらく後のことであったのであろう。青邨が香淳皇后の指導にあたることになったのは、晩年の玉堂の推挙によるものであった。

青邨画伯によるご指導の様子は、巻頭の青邨画伯自身の記述そのままである。入江、徳川両元侍従長の記述にも、そのままのことが記載されている。その批評は玉堂以上に厳しく、「いい」とか「いけない」とか言うだけ、最高の評価は、夫人を呼び、一緒に拝見するという「ばあさんや」の一言であった(P72参照)。葉山御用邸で共に写生をなさったり、時には青邨が皇居に参内して、直接、批評することもあったが、やはりその多くは、侍従が絵を運んでのやりとりであったという。しかし、青邨が自分の理念をもって、正直な真情で率直に批評したことこそが、香淳皇后が、御自身で御自身の技法を体得され、豊かな表現力を生み出されることになったのであろう。

昭和三十九年の正月、毎日新聞朝刊に十回シリーズの「宮廷十話」が掲載された。その第五回は入江による「皇后さまのお絵」で、その冒頭に「皇后さまのお絵が有名になった。」とあり、さらに「青邨さんもたぢいいとか、わるいとか申し上げるだけ。二人のお師匠さんとも、道にかけてはきびしく、容易なことではおほめしないが「どこへお出しになってもいい」とか「この素人らしいおおらかな味がなんともいえない。小手先の芸は玄人(くろうと)がやればいいので、こういう味を推し進めにならなければ」とか、おほめになられることもしばしば。しかし、もしそれほどでもない時には、当然のことながら「これはいけない」ときっぱりきめつけて、まことにさわやか。」と記されている。こうした率直な、真実の批評を、香淳皇后はとてもお喜びになって、むしろ、素直に絵の制作に励まれることになったのであろう。宮内庁の文化祭にも毎年、出品され、御絵は次第に人々の知る所となり、その後は、前述したように、画集が発行され、展覧会が開催されるに至った。

この間、『日記』にも、御絵に関する記載は多い。昭和四十一年の「紅白梅図屏風」のような大作に取り組まれたり、後に絵巻三部作と言われる「やつがしら絵巻」「絵巻葉山」「絵巻那須」を制作されるなど、意欲と創意、工夫が最も充実していたのが、昭和四十年代であろう。何でも絵の題材にされる、楽しくてしょうがない、とさえ感じられるほどに、実に様々なものに取り組んでいらっしゃるのである。『日記』昭和四十四年八月六日(水)に、「：お絵のことで両陛下に申上げる。東宮さまの浜名湖のお土産のカニ。もとならどこかへプイといふことだつたろうに早速お描きになった。いゝ具合に青邨激賞。」

という記述がある。この絵は、「磯の香―のこぎりがざみ」として公開された。また、昭和四十四年五月下旬に植樹祭で富山にお出かけの折には、香淳皇后は朝四時にお起きになり、四時半頃、棚雲から出た日の出を御覧になり、その後に姿を表した美しい立山連峰を写生された。この写生をもとに、翌年、「立山」を制作された。また、昭和四十一年の御作「葉山夏日―かに」(展示番号26)は、この年の六月に行かれた「葉山の夏、浜辺で、小さな蟹をたくさん捕って、洗面器に入れてさしあげた者がある。早速お写生がはじまった。十何疋の小蟹が、カラカラと走りまわっている。片側の脚四本をお描きおえになった途端、その蟹は走りまわって、どれがどれやらわからなくなった。片側の脚だけの蟹はそのままで、お写生はおわった。青邨はこれを激賞、実に躍如としている、と。・」＜入江相政「皇后さまのこと」(『不如意の美』所収)＞という背景がある。さらに、昭和四十二年の御作「静物―松葉がに」(展示番号33)は、鳥取県から献上された松葉蟹の剥製の置物を写生されたものである。この置物は長く御所内に飾られていたそうであるが、剥製ながら、水揚げして間もなく茹で上げた生きの良い蟹の表情が実に良く表されている。そして、昭和四十七年の御作「旅の思い出―ジルの踊手(人形)」(展示番号54)は、前年の御訪欧の際、ベルギーのシャルルロワ市で見た可愛らしい少年を思い出しながら、持ち帰られた人形を描かれた御絵である。多くの写生や御絵を通しての青邨とのやりとりの記事も多く、また「やつがしら絵巻」をはじめとする三点の絵巻制作について、工夫を重ねられる様子がうかがえる記事も『日記』には散見される。昭和三十八年に還暦を迎えられ、昭和四十八年には古希を迎えられたこの時期、御絵は円熟の時期へと入っていたのである。

◇

香淳皇后は、昭和五十二年七月に那須御用邸で腰椎を痛められて後、次第にご健康を損なわれることが多くなり、御絵の制作も少なくなった。長時間、お座りになることが辛くなられ、そうした様子は、御絵の線の細さ、弱々しさからもうかがえる。しかし、御絵に対する意欲は衰えることがなく、体調の良い時には絵筆を執られた。青邨画伯が昭和五十二年に亡くなって後、時折、絵の御相談を受けられた平山郁夫画伯が、次のように記述している。

「ある時、皇后陛下が、二枚のお絵をお描きになられたが、表現上のことで、相談にのって下さいと、徳川義寛さんより、お話がありました。泳いでいる魚と、南瓜が線描されていました。これから着彩されるところですが、ご健康のことで、長時間に集中して絵を描かれるのが、難しいとのことでした。その時に、皇居に伺い、久しぶりに皇后陛下にお目にかかりました。その折に今上陛下ご即位の記念に、日本美術院から、お祝いに献上された画帖を拝見しました。昭和初期の、横山大観、下村観山、安田靫彦、小林古径、前田青邨、速水御舟の諸先生の作品を、皇后陛下とご一緒に拝見させていただき、一枚ずつ、感想を申し上げました。皇后陛下は、明るいご表情で、ご鑑賞になったことが思い出されます。」＜「皇后陛下の日本画」(増補新訂版『錦芳集』所収、平成元年五月)＞

昭和三十一年以来、毎年出品されていた宮内庁文化祭への御絵の御出品も、昭和六十一年の二点が最後となった。

◇

香淳皇后の御絵は、その一点、一点に様々な背景がある。中には、とても思いのお深い作品もあろう。昭和天皇と共に、葉山や那須の御用邸で語らい乍ら散策された中で描かれた植物や魚貝類などは、楽しいひとときの情景でもある。この中の一点、「さわぎきょう」は、昭和三十七年に生物学御研究所編として発行された『那須の植物』の巻頭を飾っている。昭和天皇のご研究の成果に、一役買って出られた、微笑ましい記念の一冊である。

また、今回の展覧会では、両陛下より特別の御配慮を戴き、お手許で大切にされている三点の御絵を紹介させていただいた。特に、「白樺　春　浅間」「白樺　秋　浅間」(展示番号10・11)の二点の御絵は、両陛下御結婚の後、香淳皇后が陛下の願いをお聞きになられ、皇后陛下のお印となった白樺を主題として制作され、陛下に贈られたという御作である。香淳皇后の温かな、深い思いやりが伝わる作品である。また、「春庭―こぶし、雉子」(展示番号49)は、すでに画集等で公開されている作品であるが、香淳皇后の御遺品の一つで、両陛下は、雉子がまだ吹上御苑内で遊ぶ姿がしばしば見られたのどかな風景とともに、お元気に絵の制作に励まれておられた香淳皇后の姿を思い出されつつ、大切にされている。

昭和天皇と共に、様々に変動する長い時を歩んでこられた香淳皇后が、一つの心の拠り所としてその才を発揮された御絵は、御自身の絵という形の日記でもあり、思い出の宝箱でもある。と同時に、昭和三十年代、四十年代の、日本に自然の美しさがまだ多く残っていた時代に描かれた御絵の数々は、私たちに美しい日本の自然を思い起こさせ、懐かしさへと誘ってくれる。香淳皇后は、その御絵を通して、今の私たちに、その温かい微笑みを向けていらっしゃるのである。

太田　彩(当館学芸室主任研究官)

香淳皇后御写真 ――絵を楽しまれた日々

昭和38年２月　御誕生日を前に、洋蘭の写生をなさる。

昭和38年８月
那須御用邸の庭にて、植物の写生をなさる。

昭和42年３月　御誕生日を前に、初めての画集『桃苑畫集』を御覧になる。

昭和44年２月　御誕生日を前に、御自作の絵巻「やつがしら絵巻」を御覧になる。

昭和44年　絵筆をおとりになる香淳皇后。＜作品は「おおべにうちわ」（展示番号52）＞
お召しの着物の絵柄、やつがしらと桜は、御自筆になるもの。

昭和45年９月　那須にて、昭和天皇と御散策の合間に、植物をスケッチされる。

昭和48年２月　昭和天皇と共に皇居内を御散策、合間に橘樹のスケッチをなさる。

昭和48年２月　スケッチをもとに絵を描かれる。

昭和54年３月　皇居内の梅をスケッチされる。

昭和56年２月　「伊豆の海－つのだし」(展示番号63)を御制作される。

香淳皇后御歌より

絵画　昭和二十三年

今もなほ目にこそうかべ隆能のあてにたへなる物がたり絵は

絵巻物　昭和二十九年

なつかしき師のふであとの絵巻物まきかへしつつたびかさね見つ

紙　昭和三十九年

みそのふの楮の木もてすかせたる紙にいくとせ描ききにけり

魚　昭和四十二年

秩父の鮠（はや）屋久島の鯛長良の鮎北海の鮭をゑがきけるかな

吹上の御苑に日の本にはなき迷鳥やつがしらを
くしくもわれの見いでければ　（十首のうち）　昭和四十二年

庭廻（めぐ）りやうやくみいでしやつがしら写すまもなくとびたちしとふ

やつがしら　昭和四十二年

目にのこる影をよすがにやつがしらの姿をきぬのすそにかかまし

ドイツ　（二首のうち）　昭和四十六年

さはやかに風かよふドイツの秋の朝絵筆をとりぬ庭にたちつつ

香淳皇后の御絵

香淳皇后は、久邇宮家にいらした折に絵を学ばれ、伝統的な大和絵を習得されました。皇室に入られて後も、お忙しい御日常の中で、様々な作品に触れられ、自らも絵筆をお執りになり、次第に、表情豊かな作品を描かれるようになりました。それらの作品に、多くの人々が気品の高さと温かさを感じています。

今回の展覧会では、香淳皇后が最も制作を盛んに行われた昭和三十年代～四十年代の作品を中心に紹介します。表情豊かな描線、付立の技法、和紙の表情を生かされた墨色の濃淡の表現などには、御自身の創意と工夫も施され、絵筆をお執りになることへの真摯な御姿勢と共に、描くことを楽しまれていたご様子もうかがえます。

1　那須の夏―さぎそう　昭和31年

那須でのお写生をもとに描かれたもの。那須御用邸でご静養の折には、植物にご関心の深かった昭和天皇とご一緒に散策されては、植物などのスケッチをされ、多くの作品を描かれた。

2　泰山木　昭和31年

吹上のお庭のものを描かれた作品。力強い筆線で、堂々と咲き誇る花の表情が見事に表現されている。

3

雨中—雨蛙

昭和32年

4

若竹

昭和32年

5　枕草子絵巻　昭和32年

この絵巻は、高取稚成の作品を模写されたものである。昭和二十九年、香淳皇后は「絵巻物」と題して、次のような和歌をお詠みになっている。

なつかしき師のふであとの絵巻物
　　まきかへしつつたびかさね見つ

この和歌に詠まれた〝なしかしき師〟とは、高取のことを指し、絵巻物は高取筆の「枕草子絵巻」であろうと考えられる。香淳皇后は、どういうきっかけか、高取のこの絵巻を借りて御覧になり、模写を思い立たれたのであろう。入江元侍従長の日記には、昭和三十三年三月六日の条に「皇后さまは昨夜で枕草子の高取さんの絵のお写しもすつかりお済みの由」と記されている。お若い頃から、高取を師として大和絵に親しまれた香淳皇后が、師を偲びながら、数年を掛けて丹念に模写された作品の一つであり、本格的な技術の習得の様子がうかがえる。

6　八重桜

昭和33年

皇居内には数多くの桜が植えられ、春になると、それぞれが可憐な花を咲かせる。そうした中、日本を代表する花として、桜は香淳皇后が親しまれた画題の一つではなかったかと思われる。御遺品の中に、桜の画家として知られる跡見玉枝の桜図の色紙（P80～81、展示番号96）や、山口蓬春の桜の素描（P75、展示番号89）と共に、御自身の下絵や写生からの描き起こしかと思われる習作があり、御熱心に桜を描かれていた時期があったことをうかがわせる。

7　八重桜下絵

昭和33年か

8　菊桜

昭和33年頃か

特に、一輪の花に花弁が約二百枚もあるという菊桜は、大正年間に岡山県内で発見され、苗木に仕立てて昭和六年に献上された。この年、第四皇女厚子内親王がご誕生になったが、そのお印は菊桜とされた。厚子様は昭和二十七年に岡山の池田家に嫁がれ、昭和天皇、香淳皇后は、昭和二十八年十月に岡山での国体に行幸啓の際、鶴鳴館前に菊桜をお手植えされており、特別な思いがおありの桜ではなかったかと推察される。また、昭和四十二年には、御着用になる着物にも、自ら、やつがしらと共に桜を描かれている。

9　菊桜下絵

昭和33年頃か

10 白樺 春 浅間

昭和35年

前年四月に両陛下(当時の皇太子同妃両殿下)が御結婚されて後、天皇陛下のお願いをお受けになり、皇后陛下のお印となった白樺と、両陛下おゆかりの軽井沢にちなんだ浅間山をお描きになり、陛下に贈られた対の御作。現在も両陛下のお手許で大切にされている作品である。

11

白樺

秋

浅間

昭和35年

12

苦戸川にて—おおばしょうま

昭和35年

13

葛

昭和36年

金箔地の紙に描かれることに挑戦され、苦心なさった作品である。

14

洋蘭

昭和37年

15

那智の滝

昭和37年

16 いわな 昭和38年

那須で写生されたものは、植物ばかりでなく、こうした川魚や鳥たちもある。この「いわな」と「くまたか」もその中の作品。昭和44年に御制作になる「絵巻那須」には、この２点が再登場している。

17 くまたか 昭和38年

18 御苑春雪

昭和38年

玉堂と青邨は、ご指導に当って「手本は大自然あるのみ」と頻繁に言い続けた。香淳皇后はそのことを強く心に刻んで、動物、植物、そして風景等、ありのままの姿の写生を続けられた。どの作品においても、その表情を実に自然にとらえて表現されている。自然の風景は、細部にこだわるのではなく、全体が醸し出す表情を大切にして、その風情を実に見事に表しておられる。

19 行く春

昭和38年

20 鹿踊

昭和38年

「東北地方をご旅行中、お泊まり先の庭で鹿踊りの演技を御覧になり、その民芸品をお買い求めになってお帰りの後に、その哀調を帯びた静かな舞を再現なさるかの如くお描きになった」（徳川義寛「自由な自然観照から生まれた清澄なお作品」より）という作品。

21 川魚—おいかわ

昭和39年

22 葉山にて—あなご　昭和39年

青邨画伯が、「構図が面白く、簡単な筆致ながら、ほのぼのとした墨や彩色によって素直にその生態がとらえられている」と評した作品である。

23 竜　昭和40年

香淳皇后の御絵の中でも珍しい作品で、ご旅行先の岡山で、お手持ちの紙四枚を継ぎ合わせて描かれたもの。何をもとに描かれたのか明確でないが、勢いよく筆を走らせて表された墨の濃淡の表情と、竜の表現は、宗達の作品を思わせるような洒落た作品に仕上がっている。

24

えびがらいちご

昭和40年

25

葉山早春—ねこやなぎ

昭和40年

26 葉山夏日—かに

昭和41年

洗面器に入れられた小蟹がめまぐるしく動きまわる様を面白いとお思いになって取り組まれた作品。描かれる間にどこかへ行ってしまう小蟹の様子が、描きかけのものや、様々な角度から描かれていて、かえって躍動感が感じられる。入江元侍従長の随筆には「青邨は、これを激賞、実に躍如としている。」<「皇后さまのこと」『不如意の美』(昭和59年)所収>と記されている。

27 くるまえび

昭和41年

28

東洋蘭

昭和41年

29

道灌堀にて—かわせみ

昭和41年

皇居内のお堀は、水鳥たちの絶好の休息地である。カモやオシドリにまじって、清流を好むというカワセミもまた飛来した。

30 野鳥—しじゅうから　昭和41年

シジュウカラは、皇居にいる野鳥の中でも、その数の多い鳥である。お庭で遊び戯れる野鳥たちも、香淳皇后には大切な写生対象であった。

31 海の彼方—富士山　昭和41年

葉山御用邸の展望室から御覧になった、良く晴れた日の紺碧の海上にそびえる富士の姿である。

昭和四十六年の秋、昭和天皇と香淳皇后は、お揃いで初めての外国御訪問（ヨーロッパ各国）をなされた。その記念として発行された切手の図様の一つとして、この作品が使用されている。

32

北海―さけ

昭和42年

青邨画伯が、「満点、良いサケが出来ました」と賞賛した作品。

33 静物—松葉がに

昭和42年

鳥取県から献上された松葉がにの置物を描かれた作品。小さいながらギョロッとした眼の表情が実によくとらえられている。

34 那珂川のほとり—にじます

昭和42年

35 笠島―ちょうちょううお　昭和42年

この２点の作品は、後に「絵巻葉山」にも描かれた。特にたこのユーモラスな表情は、香淳皇后の写生眼と感覚の鋭さが表れている。

36 葉山の磯にて―たこ　昭和42年

37　迷鳥―やつがしら　昭和42年

昭和四十二年の春、四月初め頃、吹上御所のお庭に飛来し、四日間留まった珍鳥、ヤツガシラをお描きになった作品。ヤツガシラはアジア大陸に生息する鳥で、渡り鳥ではないので、わが国に飛来することは珍しい。正倉院宝物の撥鏤尺にも表現されている。香淳皇后は、このヤツガシラを絵巻に描かれ、ご自作の和歌四十首を添えられたほか、自ら御着物にも桜と共に描かれ、愛用された。（P14御写真参照）

昭和四十二年御歌より

いただきにかんむり羽のつらなりて
　さまおもしろき鳥はまひきぬ

目にのこる影をよすがにやつがしらの
　姿をきぬのすそにかかまし

38 後庭—西洋芙蓉

昭和42年

青邨画伯が、「非常に面白い」と評された作品。花や葉の向きや大きさ、墨だけで描かれた葉や茎のそれぞれの表情とその強弱、全体に構図も、表現も堂々と力強い中、花びらの柔らかさも際立ち、画面全体に何とも言えないリズムが漂う。

39 麓の初夏—うわみずざくら 昭和42年

40 新秋—ぶどう 昭和42年

41

高原—くがいそう

昭和43年

42

初秋—いちじく

昭和43年

43 那須の山道—はくうんぼく

昭和43年

「大変良い。花も葉も構図も、全て良し」と青邨画伯が微笑んだ作品。花や葉先の繊細な筆使いが、この花の優しさを良く表している。

44

吹上の宵—あおばずく　昭和43年

45

葉山の海—こち、くらかけとらぎす　昭和43年

魚にも御関心の深かった香淳皇后は、その表情を実によくとらえられている。何気なく画面に配置された三匹の魚。ほぼ上面から写生された魚が、実にユーモラスである。この中のくらかけとらぎすは、翌年制作の「絵巻葉山」にも描かれる。

46

磯の香り—かさご

昭和44年

この２点の作品も、同年制作の「絵巻葉山」に描かれた。葉山御用邸での自然との触れ合いもまた、香淳皇后の御絵を豊かにした。

47

はぜ

昭和42年〜44年頃

48　絵巻　葉山　昭和44年

香淳皇后の絵巻三部作の一つで、前年に制作された「やつがしら絵巻」に続く作品。これとほぼ同時に「絵巻那須」を制作され、葉山、そして那須の自然の連作とされた。

巻頭和歌

潮騒もやゝになきゆく葉山のうみ
　　なみ路はるかにみ船はいてゆく

巻末和歌二首

白きかもめ紺碧の海につとひきぬ
　　かつをのむれを追ひきつらむか

うちあけし貝ひろふさへさむき日を
　　藻刈人らは海にいてゆく

49 春庭—こぶし、雉子

昭和44年

以前の吹上御苑には、多くの雉が戯れる光景が見受けられた。昭和天皇は、昭和31年の新年歌会始に際し、「早春」という御題に「たのしげにきざす雉子のあそぶわが庭に朝霜ふりて春なほ寒し」という御製をお詠みになっている。また、香淳皇后はこの御絵を描かれたこの年、「雉子」と題して「きざはし階のしたまで雉子のよりくなり小草の種をよろこびもとめて」と御歌を詠まれている。香淳皇后の御遺品として、両陛下が大切にされている作品。

50 白の沈黙 昭和44年

51 すっぽん 昭和44年

52

おおべにうちわ（アンセリウム）

昭和44年

53

晩夏―くがいそう

昭和45年

54 旅の思い出—ジルの踊手（人形）

昭和47年

前年の昭和四十六年九月末から十月半ばにかけて、昭和天皇と香淳皇后はデンマークなどヨーロッパ七カ国を訪問された。この絵は、ベルギーのシャルルロワ市において、歓迎行事の際に踊られたバンシュという町の有名なカーニバルの踊り「道化師ジル」に登場した愛らしい少年を思い浮かべられながら、その踊り手の人形を描かれた作品である。

55 秋立ちて—ぶどう 昭和47年

56 秋光—いちじく 昭和47年

57 秋澄む—菊 昭和48年

58 伊豆にて—とけいそう 昭和48年

59 江浦―すずき 昭和48年

60 熱帯の海―貝 昭和51年

61 つゆのころ—銀杏 昭和52年

62 須崎にて—はやとうり 昭和53年

63

伊豆の海―つのだし

昭和56年

香淳皇后と画伯たち

香淳皇后の絵の楽しみは、自ら筆をお執りになることと同時に、様々な絵画作品に接して鑑賞されることにもありました。師として仰がれた、高取稚成、川合玉堂、前田青邨の三画伯はもちろんのこと、山口蓬春、奥村土牛とも、写生を通しての何らかの親交があったことを、香淳皇后の御身近にあった画伯たちの小品からうかがうことができます。また、御身近にあった他の作品によっても、熱心に鑑賞され楽しまれる中で、その描法等に親しまれたこともまたうかがえます。

ここでは、こうした香淳皇后の御身近にあった画伯たちの作品を通して、その温かい交流の様子を紹介します。

高取稚成

高取稚成（一八六八～一九三五）は、佐賀県の出身で、本名を熊夫、幼名を熊若（久麻若）という。幼少の頃から絵が好きで、若くして住吉広賢の門下に入り、さらに山名貫業、松原佐久にも学び、内国勧業博覧会、文展等に出品をし受賞を重ねて、大和絵の第一人者として活躍した。大正天皇御即位に際しては、宮内省の依頼で、「御即位式絵巻」全九巻を制作したという。また昭和四年の伊勢大神宮御遷座の折にも、その情景を二巻の絵巻物にまとめた。こうした活躍の中で、香淳皇后の御父君、久邇宮邦彦王の信任が篤く、香淳皇后が久邇宮家にいらした折から、その絵画指導にあたっていた。

高取は、本格的な大和絵を描ける画家であった為か、宮内省、皇室に関わる作品の制作が少なくない。近代という、ともすれば新風に流されがちな時代にあって、彼は一貫して大和絵の画法をいかして、有職故実を重んじた作品を制作し続けた。

昭和天皇と香淳皇后の御婚約が決まって後、そして御結婚の後も、その指導は変わることなく続けられたという。香淳皇后の絵具の用い方の上手さ、確かな筆線は、この高取による大和絵指導の時代に行われた基本的技術の習得が確実に身についておられることによろう。高取の作品は決して派手なものではないが、どんな小品であっても堅実であり、彼の幅広い素養がうかがえる奥深いものである。

64 色紙（童子奏楽・蛇篭図） 大正～昭和初期

65　赤坂離宮御苑（春）　昭和3年

御大礼につき、貞明皇后より香淳皇后へ贈られた作品。高取は、貞明皇后の御用を受けることも多かった。本屏風は、高取には珍しい風景描写の作品で、その優れた技量を示している。

〈参考〉　同上（秋）

川合玉堂

玉堂は、明治六年(一八七三)、岐阜県に近い木曽川沿いの愛知県葉栗郡外割田に生まれる。本名芳三郎。明治十四年には岐阜市内に移り住み、明治二十年に京都に出て望月玉泉(一八三四～一九一三)に入門した。数々の展覧会に出品して好成績をあげる中、橋本雅邦の作品に感銘を受け、明治二十九年に東京に出て雅邦に入門、日本美術院の創立に参加する。この頃より、その画風は四条派と狩野派を融合させた独自の画風を示すようになり、水墨による詩情溢れる作品が大きな反響を呼んだ。明治四十年創設の文展では第一回より審査員をつとめ、以後、官展を中心に活躍。大正四年から昭和十三年までは東京美術学校教授、また大正六年には帝室技芸員となり、昭和三年の御大礼の際には、悠紀・主基屏風のうちの悠紀地方を担当して制作、昭和十五年には文化勲章を受章している。昭和十九年には、戦争の激化に伴って居住を奥多摩に移し、戦後は「偶庵」と名付けられた画室で、風景の中に人々の生活を描く作品を主体として、意欲的に制作し続けた。この地で画の世界に没頭した玉堂は、昭和三十二年六月三十日、その生涯を終えた。

日本画壇の第一人者として活躍した玉堂が、香淳皇后の絵の指導にあたることになったのは、昭和十九年四月からである。その前年には、何度か、御所に招かれて香淳皇后とお子様方の御前で揮毫している。しかし、戦争が激化する中、同年七月には奥多摩に疎開し、以後、そのまま居住することになったので、香淳皇后と玉堂画伯のやりとりは、侍従が玉堂のもとに御絵を届け、意見を伺うという方法で行われた。玉堂は、お手本というものは決して描かず、「手本は大自然あるのみ」と言い続け、御作についての批評は、ただ「いい」とか「わるい」とかだけであったと言う。しかし、当館が香淳皇后の御遺品として受けた作品の中には、玉堂の自然のとらえ方を示す習作が多く含まれていた。もちろん、これらは決してお手本という意味で差し上げられた訳ではなかろう。侍従を通しての御質問に応えて渡されたものであるかもしれないが、玉堂が風景を、鳥を、花を描くとどうとらえるのか、自分はこのように描きます、ということを示してのものであったと思われる(展示番号80～83参照)。こうした玉堂の作品とやりとりを通して香淳皇后が習得されたのは、全体の雰囲気を画面にそのまま写し描くこと、それぞれの素材が持つ自然観を大切にすることであったのではないかと考えられる。指導ということでは、玉堂は言葉少なであったが、香淳皇后の御質問や御心遣いに温かく応えていたのである。

66

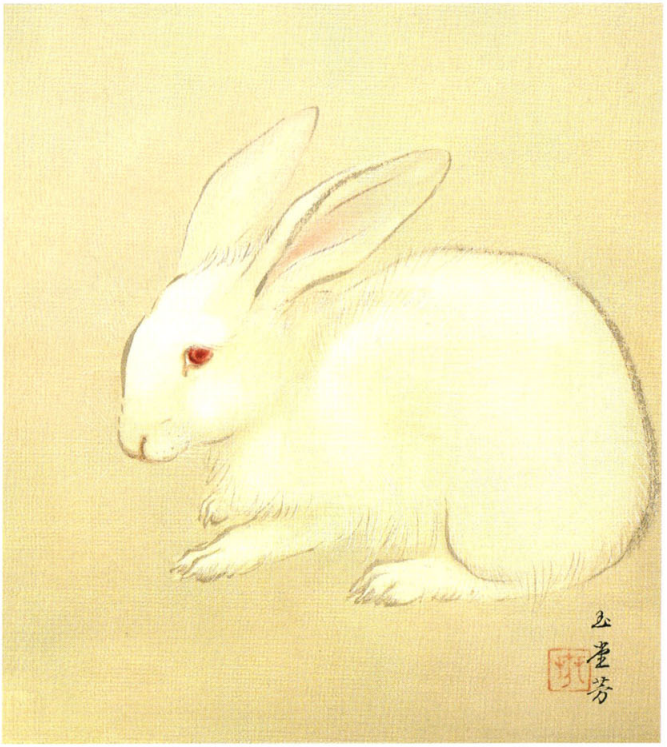
色紙(牛・兎図)　制作年不詳

この2枚の色紙は、昭和天皇の生まれ年の干支の牛、香淳皇后の生まれ年の兎を描いたもの。小画面ながら、その豊かな表情は、玉堂の持ち味を十分に示している。

67

杜若に白鷺　大正6年

大正六年五月に島津公爵邸行幸の際、玉堂が御前揮毫した作品。貞明皇后御遺品として香淳皇后が受け継がれ、お側に留められていた作品である。



68 **渓山晩晴** 昭和18年

本作品は、昭和十八年四月十日、昭和天皇と香淳皇后の第一皇女成子内親王の女子学習院中等科御卒業の御祝の際に、御前揮毫した作品。玉堂自身による箱書きがある。

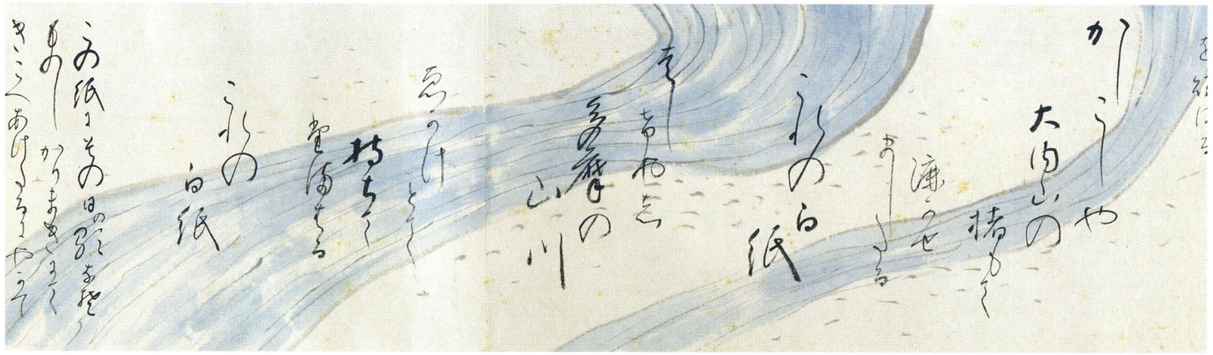
70 **風景図（深山渓谷）** 制作年不詳

お手本として渡されたものとの伝来があり、落款印章を伴わない。玉堂は写生帖を手に、山々を巡った。そうした中でとらえた一風景であろう。

69
風景図
制作年不詳

玉堂の自然描写は、明治四十年の東京勧業博覧会で一等賞を受けて好評を博した「二日月」、大正五年の「行く春」、大正十三年の帝展出品作「雨後」などの代表作によって、すでに評価の高いものであったが、香淳皇后の絵の指導にあたった昭和十九年以降は、むしろ、奥多摩に隠棲して後の自然と人との温かい関わりが感じられる作品を描き、そうした表現描写を通しての指導の影響が香淳皇后には大きかったであろう。実際、香淳皇后の御絵には温かさが感じられ、多くの人がその点を評価している。自然を描く中に、人の息吹が感じられるものであること、それが生きた画面を創りあげることを、玉堂から受け取られる習作や、言葉から、香淳皇后は学ばれたのではなかろうか。

上掲の二点の「風景図」は、作風から昭和二十年代半ば頃のものかと考えられるが、玉堂が奥多摩時代に盛んに描いた風景で、草木がそよぎ、水が流れ、人々が会話する、のどかな山村の息吹が感じられる。すでに発表されている昭和二十四年頃の作「山村春秋」に近い作品である。吹上御所内のお身近に飾られていた作品であった。



71　植樹祭　昭和23年

昭和二十三年四月四日、青梅市永山公園で植樹祭が行われた際、玉堂はそこへ出向いた。その際、香淳皇后が玉堂を見つけられてお声をかけられ、休所に呼ばれた玉堂は、紙包を頂戴した。この御下賜の紙に、玉堂は、植樹祭での両陛下を思いながら、得意の和歌に御礼の心を込めて、後に巻子（展示番号71）と数枚の作品（展示番号72～78）を差し上げた。香淳皇后と玉堂との、互いを尊敬しあう温かい親交がうかがえる。

玉堂は、奥多摩で活動する中、和歌や俳句にもその優れた才能を示し、『多摩の草屋』などの家集も刊行されて、歌人としても知られる。こうした玉堂の作品が香淳皇后の身近にあったことは、後に香淳皇后が制作された絵巻三部作「やつがしら絵巻」「絵巻葉山」「絵巻那須」の御制作の一つのきっかけになったであろう。

（絵巻本文）

昭和廿三年四月四日青梅の
植樹祭に行幸啓桧苗を
御手植遊はさるゝを拝して

大君のうちおろします鍬の音
　くぬちにひゝきくぬちみなうゑむ

よきことにあうめの山のさちをまねひ
　國こそり植よ棟梁の材を

みたけわれ老らくの身にあまりある
　いけるしるしをおもはさらめや

御途次に於てはからすも
皇后陛下より御言葉をたまはりて

草の中のぼけに玉歩をとめたまひ
　春のひかりかゝやき老の目になみた

御休処に召されて
御紙壱包並に御菓子
を賜はる

かしこしや大内山の楮もて
　漉かせましたるこれの白紙

はしけやし多摩の山川ゑかけとて
　持ちてたまはるこれの白紙

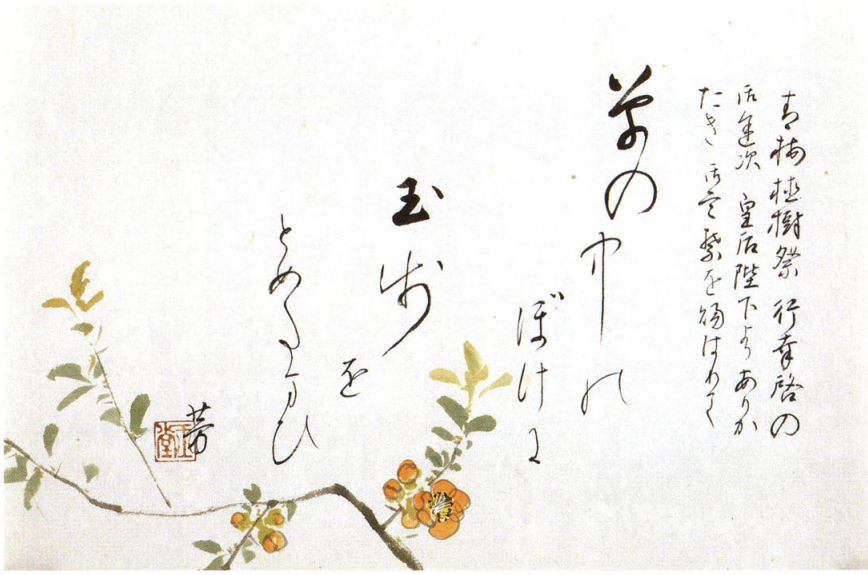
この紙にその日の影なと
ものしかりまきにて
きこへあけたるにやかて
御言葉のこもれる御内儀
よりの御返しに添て此
頃の事なれはとてかりま
きは御かへしたまはる

雲井たかく声をとゝめてあまさかる
　多摩の川辺にかへるかりまき

芳　印

御下賜の御紙もてしたゝむ

72 植樹祭（桧図に和歌） 昭和23年

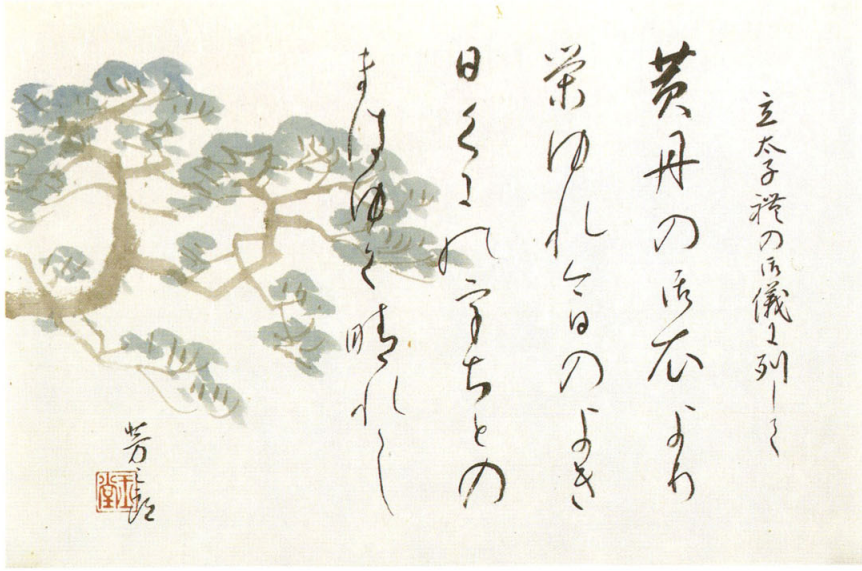


74 植樹祭（木瓜図に和歌） 昭和23年

75 植樹祭（富士図に和歌） 昭和23年

76 若草（富士図に和歌） 昭和23年

77 立太子（菊花図に和歌） 昭和27年



78 立太子（松図に和歌） 昭和27年

79 「水声鳥語」習作　昭和20年代

昭和27年頃の制作として発表されている「水声鳥語」の習作。

80 「真鶴」習作　昭和20年代

昭和25年頃の制作として発表されている「真鶴」の習作。

81 吊花にジョウビタキ 昭和20年代

82 牡丹 昭和20年代

83 富士 昭和20年代

前田青邨

前田青邨は、明治十八年（一八八五）、現在の岐阜県中津川市の生まれ、本名を廉造という。同三十四年に上京して梶田半古に入門し、古画と有職故実を学んだ。翌三十五年には日本絵画協会・日本美術院連合第十二回絵画共進会に出品して入選し、師から青邨の号を受けて活躍し始める。明治末頃からは、古絵巻の研究に基づいた画題を、大和絵の明るい色彩で表した数々の力作を制作。そして、さらに水墨表現を加え、また大正年間の朝鮮半島、中国、エジプトからヨーロッパでの旅行で習得した東洋絵画、西洋絵画の成果を生かした装飾性の高い作品をも生み出した。この間、院展を中心に次々と作品を発表、帝国芸術院会員になり、新文展審査員もつとめた。昭和十四年には北鎌倉に画室を築き、同十九年に帝室技芸員。戦後は日本芸術院会員、東京芸術大学教授、さらに三十年に文化功労者となり、文化勲章を受章した。文化財保護にも助力し、昭和二十五年より文化財保護審議会専門議会委員をつとめたほか、四十二年からは安田靫彦と共に高松塚古墳壁画の模写をした。昭和五十二年十月、九十二歳で亡くなるまで、その制作意欲は旺盛であった。

青邨は、昭和六年には宮内省の依頼で長良川の御漁場を描いたほか、昭和十年には岩崎家の依頼による献上画「唐獅子」という六曲一双の大作の屏風を納めた。また、昭和四十三年に完成した新宮殿の石橋の間の絵を制作するなど、皇室に関わる作品制作も少なくない。

この青邨が、香淳皇后の御絵の指導に当たることになったのは、玉堂の最晩年の推挙によるもので、昭和三十三年四月一日に、入江元侍従長が北鎌倉の青邨を尋ね、快諾して後のことになる。青邨がどういう姿勢で香淳皇后のご指導にあっていたかは、巻頭の青邨自身による執筆文「皇后さまと絵」（P4～7）に表れていよう。入江元侍従長の随筆等によると、青邨の御絵に対する批評は、玉堂以上に厳しかったという。やはり、「いい」、「だめ」とか「いけない」との評言だけ。しかし、時に「ばあさんや」と大声で夫人を呼ばれる。実にいい、と青邨が思うと、これは一人で拝見するのは勿体ない、家内にも見せなくては、ということであった。「ばあさんや」は、御絵がとてもよろしいという、青邨の最高の評価だった。

青邨は、彼が居住した北鎌倉と葉山が比較的近かったこともあって、香淳皇后が葉山御用邸に行かれた際に、二、三度出向いたことがあった。その時には、花瓶に活けられた「山茶花」とか「椿」を、二人で写生された。被写体を間に置いて、異なったアングルからの写生を二人でなさり、それが出来上がると青邨はいろいろと批評して差し上げたという。香淳皇后はこれをもとに本画の制作をされるが、それについて青邨は一切嘴を入れない。出来上がった作品について、「いい」とか「わるい」と言うだけであった。しかし、こうした深く、温かい心からの突き放しが、香淳皇后御自身、自ら工夫を重ねられて、御自身の画境をお開きになる結果になった、と入江元侍従長は記している。（「前田青邨」『いくたびの春―宮廷五十年』）

84 初雪 昭和36年

85 馬頭 昭和46年

86 樹木 昭和40年代

87 富士 昭和40年代

88

あざみ（素描）

昭和40年代

山口蓬春

明治二十六年(一八九三)生まれ、大正三年に東京美術学校西洋画科に入学し、同科在籍中の五年第三回二科展、翌年第四回同展に入選するが、七年に日本画科に転科し、十一年東京府主催平和記念東京博覧会に出品した「雪の鳳凰堂」が入選、翌年、同科を首席で卒業する。その後は帝展に出品、受賞を重ね、その一方で松岡映丘主宰の新興大和絵会にも参加して活躍した。戦後はモダニズム的方向の作画を追求して活躍し、日本芸術院会員、日展理事となり、昭和四十年には文化功労者となり、文化勲章を受章した。昭和四十三年完成の新宮殿においては、正殿松の間回廊左右の杉戸絵において、橋本明治の「桜」と共に「楓」を担当した。昭和四十六年五月没。

蓬春は、戦後は昭和二十二年より葉山に居住し、制作活動を行った。入江元侍従長が懇意にしていたこともあり、葉山の御用邸に赴いて、香淳皇后と絵の話をすることもあったという。

因みに、香淳皇后が御絵を制作される時に使用された卓や脇卓、椅子等は、蓬春自身の考案によって製作、使用していたものを、入江元侍従長が実に良くできているということで、香淳皇后にも同様のものをお作りしたということである。

92　秋意　昭和37年

89 桜図素描　昭和16年頃

他の一枚とあわせ、これらは、昭和十六年四月二十九日、貞明皇后より香淳皇后に贈られた長柄菊桜と奈良八重桜を描いたもののようである。ただ、記述に跡見玉枝との関わりもうかがえ、その前後関係は明確でない。しかし、本図は蓬春の素描に間違いない一枚である。

昭和三十九年に発行された『山口蓬春作品集』所収の入江元侍従長の「なにかが」という寄稿文によると、「もう十五年も前になるが、夏の一日、葉山の御用邸へ、ハナショウブの写生をお持ちになって、皇后さまに写生についてお話になったことがあった。」という。この時の作品に相当するかと考えられるのが、展示番号90「花菖蒲(素描)」である。さらにその後に収納されたことが明確な展示番号91「菊(素描)」もあり、葉山での香淳皇后と蓬春との交流は、数回に及んでいたようである。そうした中、今回の展示作品で興味深いのは、展示番号89「桜図素描」である。この図は、当館が香淳皇后の御遺品として受けた様々な色紙類の中に、香淳皇后の習作と考えられる種々の桜図素描と共に残されていたものである。画中には昭和十六年に描いたものかと推察される記述があるが、この絵自身が香淳皇后のお手許に渡ったのは、昭和三十年頃ではないかと考えられる。それは、香淳皇后の御絵「八重桜」(展示番号6)、「菊桜」(展示番号8)の下絵が共に収納されていたことによる。蓬春は、写生ということを通して、自然、香淳皇后の絵に大きな影響を与えていたのである。

蓬春は、その著『新日本画の技法』(美術出版社、昭和二十六年)の中で、「写生は、作者の観たまま感じたまま、知ったままを、そのまま残らずそこへ描きこんだものでなければ、完全な写生ということは出来ない。その三つの中の一つを欠いてもいけないのである。」と記し、また「知るということは、教えられることでもあるが、それよりも、自分の力で発見して知ることの方が、はるかに意義深い。……最初は「観たまま」の写生、次いで「感じたまま」の写生が、それから、更に進んで、「知ったまま」の写生に至るのであるが、一つの写生が、この観たまま、感じたまま、知ったままを、一つの写生の中に包括することが出来るようになれば、その写生は立派な写生であり、このような写生によって初めて立派なタブロウが創作されることになるのである。」とも記している。こうした蓬春の姿勢から香淳皇后が学ばれたものは大きかったことであろう。

90

花菖蒲（素描）　昭和20年代中頃

画中に「六・十八」の日付がある

91

菊（素描）　昭和20年代～30年代初

画中に「今井氏の菊　十一、五」の記載がある。この素描に描かれる菊花は、昭和三十一年六月に依頼され、同年末頃に納められた宮殿装飾用の作品「菊」の中に描き込まれた一つであろう。

奥村土牛

明治二十二年(一八八九)、東京生、本名義三。明治三十八年、梶田半古に入門し、塾頭だった小林古径に多く指導を受けた。同四十年、東京勧業博覧会に「淳盛」が入選、大正六年に土牛と号し、昭和期に入って以後は院展を中心に出品、受賞を重ね、東京美術学校(現東京芸術大学)、帝国美術学校(現武蔵野美術大学)、女子美術大学で後進の指導にも当たった。昭和三十七年、文化功労者となり、文化勲章を受章。日本美術院に尽力し、昭和五十三年には理事長となった。平成二年没。

土牛の作品は、美しい色面を主にして画面を構成、表現していく独特な手法を主体として、新しい日本画にさらに新鮮さを深めた。自伝『牛のあゆみ』の題名が示すように、土牛は、最初から、常にこつこつと絶えざる歩みによって前進して自らの画風を創り上げたが、「私はデッサンしている時間が一番楽しい」と語るように、その基本は写生にあった。

土牛は、彼が昭和五十三年に宮殿装飾用の「富士」を完成して納め、日本美術院理事となったこの年から数年にわたって、香淳皇后と写生を通しての交流があったようである。この年、土牛はすでに八十九歳の高齢であったが、その数年前から素描展のほか、各展覧会に出品を続け、なおも意欲的な活躍をしている。この頃、香淳皇后は、前年に腰椎を痛められたこともあって、絵の御制作はあまり行われなくなっていた。そうした中で御覧になった土牛の見事な素描は、香淳皇后の絵の御制作意欲を、少なからず駆り立てたことであろう。昭和五十三年の香淳皇后の御絵「須崎にて―はやとうり」(展示番号62)は、以前の御作に較べれば力強さに欠けるものであるが、体調を崩された香淳皇后が、一筆ずつ丁寧に、写生を楽しまれた作品であり、土牛の影響がうかがえる。

93

山中湖より　昭和53年

画中に「五十三年二月　山中湖」とある。宮殿装飾画「富士」制作のためのデッサンの一枚と考えられる。

94　牡丹（素描）　昭和53年

画中に「五十三年五月二日」と記される。

95　牡丹（素描）　昭和40年代〜昭和50年代

画中に鉛筆書きの記載があるが、消されている為、「五月七日」の日付以外は明確でない。花瓶に活けられた牡丹のデッサンである。

跡見玉枝

跡見玉枝（一八五九～一九四三）は、従姉の跡見花蹊について四条派を学び、後に長谷川玉峰、望月玉泉に画の指導を受け、また国学者でもあり桜花画家でもあった宮崎玉緒に学んで、明治から昭和期に活躍した桜の画家として知られる。京都高等女学校、京都府画学校、跡見学校（現跡見女子大学）、共立女子職業学校等で子女の教育に当たりながら、日本美術協会展覧会をはじめとする様々な展覧会、博覧会に出品して創作活動も行った。

玉枝は、明治二十六年（一八九三）には明治天皇第八皇女允子内親王の新御殿襖絵等を制作、同三十年にはその御用掛となった。また、明治二十七年の大婚二十五年に際しては「桜花百種　一巻」を献上、昭和五年には「御国の花香」という玉緒の和歌と玉枝の桜図の画帖を皇太后に献上、昭和八年より宮内省の依頼で御苑の桜の写生を行い、同十八年には昭和天皇第一皇女成子内親王の依頼で桜花の大幅を制作して献上する等、皇室とも縁の深い画家であった。特に、女子教育に尽力したこともあってか、昭憲皇太后、貞明皇后、そして香淳皇后と、明治から昭和期にかけての歴代皇后との交流があった。

96　桜図色紙

大正～昭和前期

玉枝による五枚の色紙で、各図裏面に玉枝によって何処の何という桜かを記載した紙札が貼り付けられている。

鎌倉翁桜

楼門御衣黄桜

岡山菊桜

印度ひまらや桜

植物園寒桜

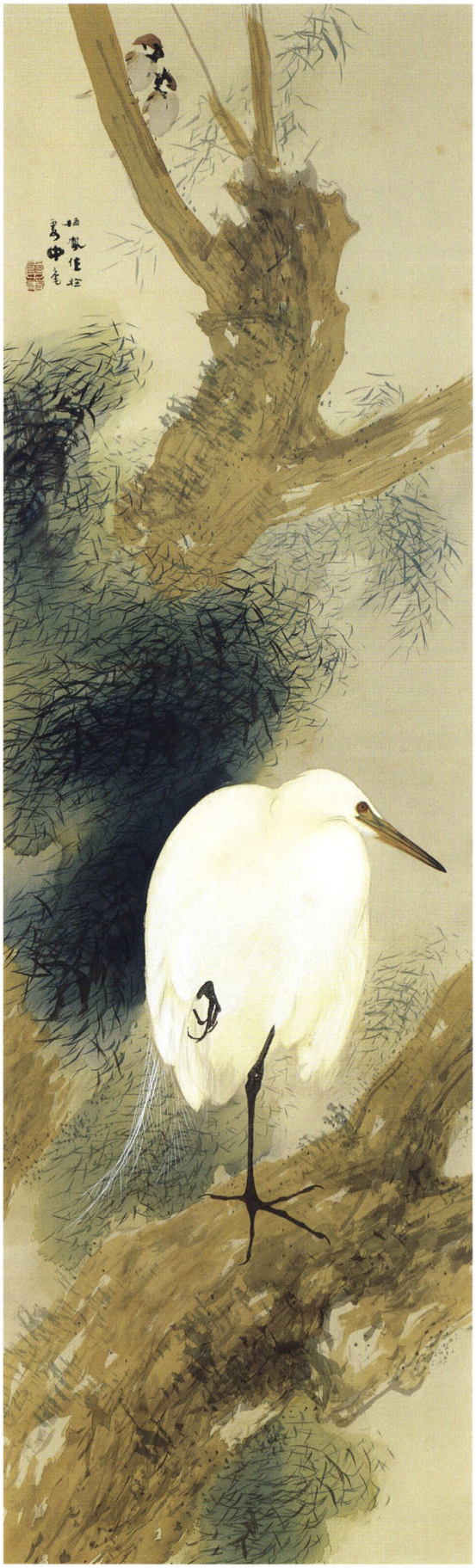
97
桜図屏風
昭和7年

左右各扇に5種類ずつの桜枝を描く。落款より、玉枝74歳の作と知られるが、伝来の詳細は不明である。

竹内栖鳳

竹内栖鳳（一八六四～一九四二）は、明治から昭和前期にかけて、京都で活躍した画家で、伝統的な四条派の画風に、西洋画法等を取り入れ、独自の画風を展開した。展覧会への出品、受賞はもちろんのこと、染織の下絵等にも取り組み、後進の指導にもあたって、京都画壇の第一人者として大きな影響力を持った。大正二年に帝室技芸員となり、昭和十二年には第一回の文化勲章を受章している。

本作品は、香淳皇后の母君、久邇倪子様の遺物として、昭和三十二年頃、兄君の朝融氏より献上された作品で、雨上がりの爽やかな明るさが、情趣豊かに描かれている。箱書より、大正十三年五月の作品であることが分かり、この年一月の昭和天皇と香淳皇后の御結婚に由縁ある作品であることが想起される。



98　雨霽　大正13年

横山大観

明治から昭和にかけて活躍して、ことに名高い横山大観（一八六八～一九五八）は、明治二十二年に開校した東京美術学校の第一期生で、各展覧会への出品と受賞を重ねて活躍した他、日本美術院創立に参加するなど、画壇の様々な動向にも大きな影響を与えた。彼の積極的な姿勢は画風の展開にも表れ、水墨表現の追求、鮮やかな色彩による装飾的画風の展開など、その創作意欲は最後まで盛んで、近代日本画の改革運動を、芸術的に、社会的に推進した画家であった。昭和六年に帝室技芸員、昭和十二年に文化勲章を受章、昭和二十六年に文化功労者となった。

本作品は、昭和三年の御大礼にあたり、東伏見宮周子妃殿下より香淳皇后に贈られた作品である。一種類の花だけを大きく空間を取って描いた、大観には珍しい作品である。菊花の花びらの一枚一枚の表情を大切に描き、葉は墨の暈かしに緑青と金泥によって微妙な表情を加え、菊花の部分を中心に背面に薄く金泥を施して、画面全体に荘厳さを加えている。香淳皇后がお手許に置かれた作品である。

99 菊花　昭和3年

上村松園

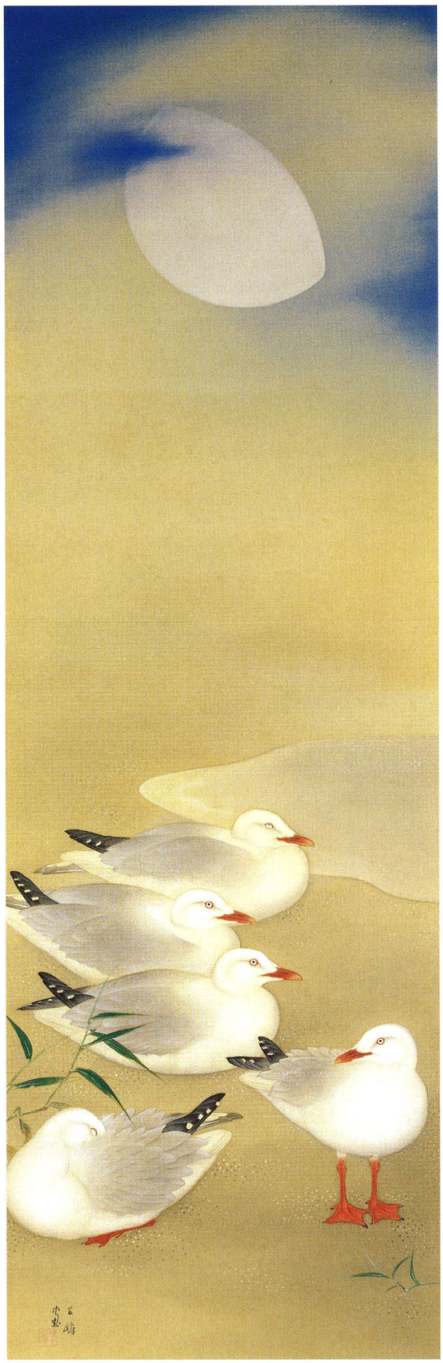
上村松園（一八七五～一九四九）は、明治から昭和期にかけて活躍した京都画壇の代表的女流画家である。京都府画学校に入学して画の道に進んだ後、鈴木松年、幸野楳嶺、竹内栖鳳に師事し、歴史や風俗に取材した作品を多く発表して、内外の展覧会で活躍した。特に大正四年の第九回文展出品作「花がたみ」、大正七年第十二回同展出品作「焔」、昭和十一年の同展招待展出品作「序の舞」など、市中町方の女性の日常生活や、謡曲、王朝美人に題材を求めた美人画の力作で知られる。昭和十九年に帝室技芸員、昭和二十三年には女性としては初めて文化勲章を受章した。

この「雪月花」もまた、松園の代表作である。松園は、大正五年、文展会場へ貞明皇后が行啓の折、御前揮毫に「白拍子図」を描き、翌年の京都行啓の折には御前揮毫に「初音図」、さらに同七年の帝展会場行啓では御前揮毫に「紅葉狩」を描いた。この間に貞明皇后より画の御用命を受け、思案を重ね、幾度もの下絵制作を重ね、二十一年もの歳月をかけて完成したのが、古典文学を題材にしたこの「雪月花」三幅対であった。細緻な筆線と、明快な色彩による名作である。貞明皇后の御遺品として香淳皇后が引き継がれ、お側に置かれていた作品であった。

100 雪月花　昭和12年

87　香淳皇后と画伯たち

西村五雲・西山翠嶂



101　朝陽群鶴・月下群鴎図　昭和3年

西村五雲（一八七七～一九三八）、西山翠嶂（一八七九～一九五八）共に、明治から昭和期にかけて京都画壇で活躍した画家で、共に竹内栖鳳の門下で学んだ。五雲は、初めの師である岸竹堂、そして栖鳳の画風をよく学び、軽妙な筆致による写実的表現によって花鳥や動物画を中心に描いた。また翠嶂も栖鳳ゆずりの作風を示して、人物、山水、そして花鳥を題材に多くの作品を残している。

本作品は、昭和三年の御大礼にあたり、香淳皇后の実家である久邇宮家からの依頼で制作され、同宮家より献上された。右幅は五雲による「朝陽群鶴図」、左幅は翠嶂による「月下群鴎図」で、それぞれ画家の持ち味が十分に表れた珍しい合作である。香淳皇后のお手許で、大切にされていた作品である。

堂本印象

102　千代田城　昭和14年

堂本印象(一八九一～一九七五)は、京都市立美術工芸学校、京都市立絵画専門学校で学んだ後、西山翠嶂に師事し、帝展を中心に活躍した。昭和十九年に帝室技芸員、同三十六年に文化勲章を受章し、文化功労者となる。日本画家でありながら、洋風表現や油彩画、彫刻や工芸にも挑戦するなど幅広く活動し、大正十四年に大徳寺山内龍翔寺の杉戸絵を描いて以後は、醍醐寺や高野山など、数多くの社寺の襖絵や天井画等も手掛けて活躍した。

この作品は、昭和十四年、枢密院議長、内閣総理大臣を務めた伯爵清浦奎吾より献上されたものである。内堀の外から皇居をとらえた写生をもとに、洋風表現を加えた穏やかな作品に仕上がっている。貞明皇后から香淳皇后に引き継がれ、香淳皇后のお側にあった作品であった。

《景雲餘彩》

103 **画帖「景雲餘彩」より**　大正11年

この画帖は、大正十一年九月二十七日、皇太子殿下(昭和天皇)が再興第九回院展に行啓された折、日本美術院より同人の制作によって献上されたものである。横山大観を筆頭に、計二十二名の画家が各一図を描き納めている。

絵を嗜まれた香淳皇后は、作品の鑑賞もお好きで、お手許にあるこうした画帖の、画家たちのさりげない小品を鑑賞して楽しまれた。前田青邨画伯が亡くなって後、時折、御絵についての相談を受けておられた平山郁夫画伯が、ご一緒に画帖を御覧になった折、香淳皇后が「：明るい表情で、ご鑑賞になったことが思い出されます。」と記されている。

横山大観

前田青邨

山村耕花

小林古径

中村岳陵

川端龍子

瑞彩

104 **画帖「瑞彩」より** 大正13年

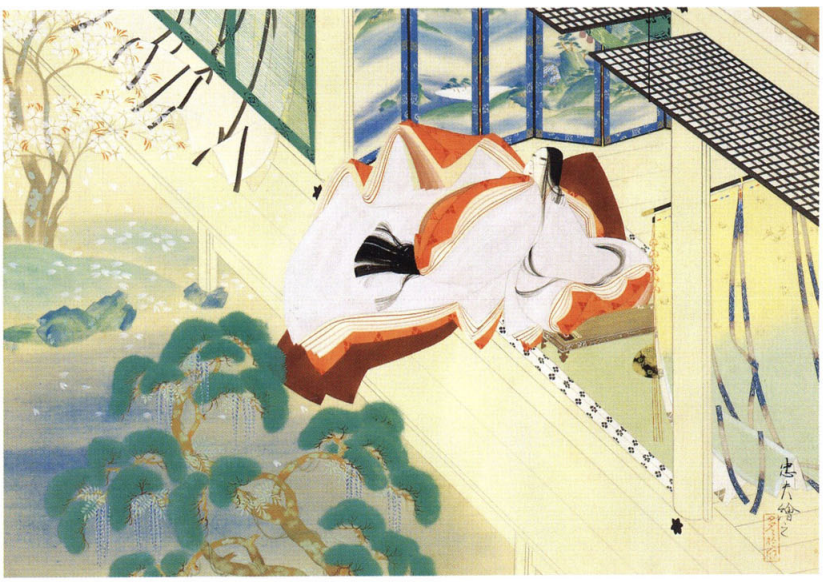
本画帖は、大正十三年一月二十六日の皇太子殿下（昭和天皇）御成婚をお祝いして、東京府が制作、献上したものである。東西を問わず、全国から選出された当時の日本画壇を代表する七十三名の画家の作品が、各一図ずつ、三帖に分けて収められている。奉祝画ではあるが、伝統的な吉祥の画題にこだわらず、画家独自の考えによる明るく温かい画題による美しい小品が多いのが、この画帖の特徴でもある。

高取稚成「蟹」

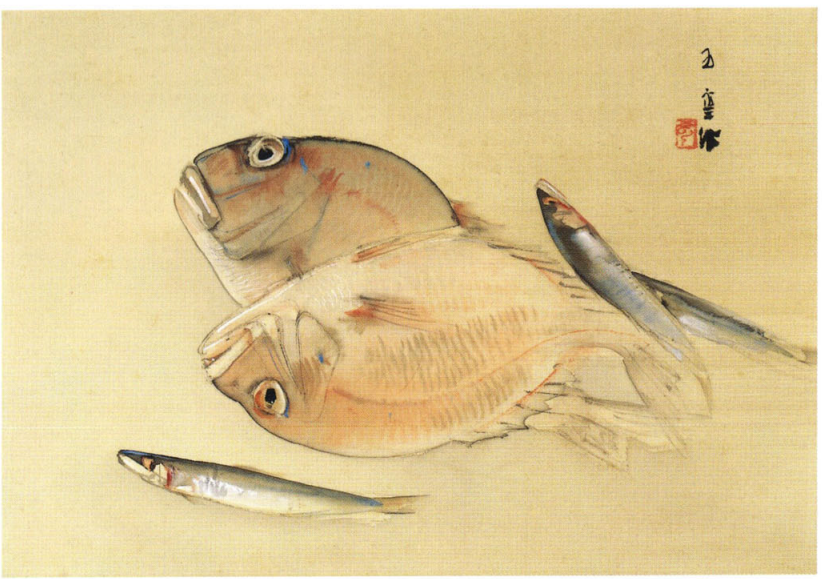
川合玉堂「時津風」

前田青邨「沙魚」

吉村忠夫「春光」

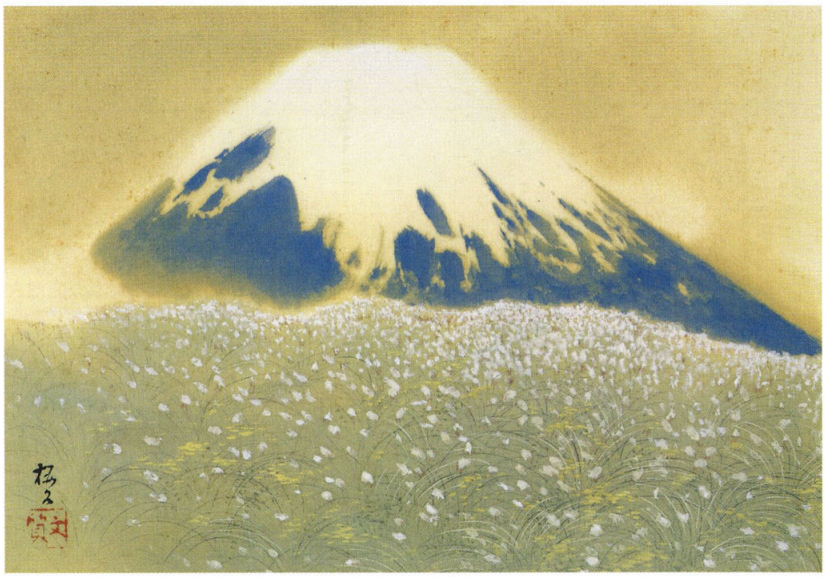


西村五雲「春の香」



小林古径「菊花」

安田靫彦「春光」



木島櫻谷「裾野」

《光彩》

105 **画帖「光彩」より**　昭和61年

この画帖は、昭和六十一年四月、昭和天皇御在位六十年の奉祝品として、日本美術院から献上されたものである。当時の日本美術院を代表する画家三十五名による各一図と、最初に理事長の奥村土牛による題字、末葉には献上の年月や献上者等を記した計三十七面が、表裏両面に配されて仕立てられている。香淳皇后のお手許に最後まで残されていた作品の一つである。

奥村土牛「聖山」

小倉遊亀「劫外の春」

北沢映月「双美」

田中青坪「二友」

＜主な参考文献＞

・画集

『桃苑画集』（昭和四十二年三月六日、宮内庁侍従職編、非売品）
『錦芳集』（昭和四十四年十一月三日、日本赤十字社編、朝日新聞社発行）
増補新訂『錦芳集』（平成元年五月三十日、宮内庁皇太后宮職編、朝日新聞社発行）

・展覧会図録

『皇后さまの絵と書展』（昭和四十九年、朝日新聞社）
『追悼展　香淳皇后のご生涯と作品』（平成十三年、日本赤十字社・朝日新聞社）

・日記、随筆等

『入江相政日記』全六巻（平成三年、朝日新聞社）
入江相政『侍従とパイプ』（昭和三十二年、毎日新聞社）
入江相政『いくたびの春－宮廷五十年』（昭和五十六年、ティビーエス・ブリタニカ）
入江相政『真夜中の硯－侍従長のひとりごと』（昭和五十七年、講談社）
入江相政『不如意の美』（昭和五十九年、中央公論社）
入江相政『入江相政随筆撰Ⅰ　昭和天皇とともに』（平成九年、朝日新聞社）

・その他

天皇皇后両陛下御集『あけぼの集』（昭和四十九年、読売新聞社）
『喜寿　皇后陛下』（昭和五十五年、共同通信社）
『皇后さま』（昭和五十九年、主婦の友社）
『昭和の母　皇太后良子さま』（平成十二年、主婦と友社）
『追悼　皇太后良子さま』（平成十二年、読売新聞社）

出品目録

会期：平成十九年三月二十七日(火)～六月十七日(日)

前期：三月二十七日(火)～四月二十二日(日)
中期：四月二十八日(土)～五月二十日(日)
後期：五月二十六日(土)～六月十七日(日)

〈香淳皇后の御絵〉

No.	作者名	作品名	員数	制作年	材質・技法	本紙寸法	所蔵または所管先	展示期間
1	香淳皇后	那須の夏―さぎそう	一面	昭和三十一年(一九五六)	紙本着色	一八・〇×五〇・二	御物	中期
2		泰山木	一面	昭和三十一年(一九五六)	紙本着色	四五・七×六〇・〇	御物	中期
3		雨中―雨蛙	一面	昭和三十二年(一九五七)	紙本着色	四五・五×五九・一	御物	前期
4		若竹	一面	昭和三十二年(一九五七)	紙本着色	四六・二×三〇・六	御物	前期
5		枕草子絵巻	一面	昭和三十二年(一九五七)	絹本着色	二七・二×一二三・四	御物	中期
6		八重桜	一幅	昭和三十三年(一九五八)	絹本着色	五六・五×三二・五	御物	前期
7		八重桜下絵	二枚	昭和三十三年か	紙本墨画	六一・〇×三九・〇、二七・三×三九・〇	三の丸尚蔵館	前期
8		菊桜	一枚	昭和三十三年頃か	絹本着色	五九・〇×三四・三	御物	前期
9		菊桜下絵	一枚	昭和三十三年頃か	紙本墨画	五二・五×四二・三	三の丸尚蔵館	前期
10		白樺　春　浅間	一面	昭和三十五年(一九六〇)	紙本着色	四〇・〇×四五・五	お手許品	中期
11		白樺　秋　浅間	一面	昭和三十五年(一九六〇)	紙本着色	四〇・〇×四五・五	お手許品	中期
12		苦戸川にて―おおばしょうま	一面	昭和三十五年(一九六〇)	紙本着色	五八・一×三九・八	御物	中期
13		葛	一面	昭和三十六年(一九六一)	紙本着色	五二・〇×六九・〇	御物	中期
14		洋蘭	一面	昭和三十七年(一九六二)	紙本着色	二九・五×四四・五	御物	前期
15		那智の滝	一面	昭和三十七年(一九六二)	紙本着色	三〇・六×四五・六	御物	中期
16		いわな	一枚	昭和三十八年(一九六三)	紙本着色	二九・三×四四・八	御物	中期
17		くまたか	一枚	昭和三十八年(一九六三)	紙本着色	四三・四×六〇・〇	御物	中期
18		御苑春雪	一幅	昭和三十八年(一九六三)	紙本着色	三三・〇×二四・〇	御物	中期
19		行く春	一枚	昭和三十八年(一九六三)	紙本着色	二九・三×四五・〇	御物	中期
20		鹿踊	一面	昭和三十八年(一九六三)	紙本着色	四五・二×三〇・〇	御物	前期
21		川魚―おいかわ	一面	昭和三十九年(一九六四)	紙本着色	二八・二×四〇・六	御物	中期
22		葉山にて―あなご	一面	昭和三十九年(一九六四)	紙本着色	三〇・一×四四・六	御物	後期
23		竜	一枚	昭和四十年(一九六五)	紙本墨彩	八一・二×五七・九	御物	前期
24		えびがらいちご	一枚	昭和四十年(一九六五)	紙本着色	二九・七×四五・五	御物	中期

25	葉山早春―ねこやなぎ	一面	昭和四十年(一九六五)	紙本着色	四七・九×五三・六	御物	後期
26	葉山夏日―かに	一枚	昭和四十一年(一九六六)	紙本着色	三〇・〇×四五・二	御物	後期
27	くるまえび	一面	昭和四十一年(一九六六)	紙本着色	四四・五×五九・〇	御物	前期
28	東洋蘭	一面	昭和四十一年(一九六六)	紙本着色	二九・九×四四・六	御物	前期
29	道灌堀にて―かわせみ	一面	昭和四十一年(一九六六)	紙本着色	三〇・一×二二・四	御物	中期
30	野鳥―しじゅうから	一面	昭和四十一年(一九六六)	紙本着色	四五・二×三〇・三	御物	中期
31	海の彼方―富士山	一面	昭和四十一年(一九六六)	紙本着色	二七・〇×二四・〇	御物	後期
32	北海―さけ	一枚	昭和四十二年(一九六七)	紙本着色	六〇・〇×九〇・五	御物	後期
33	静物―松葉がに	一面	昭和四十二年(一九六七)	紙本着色	四四・五×六四・五	御物	前期
34	那珂川のほとり―にじます	一枚	昭和四十二年(一九六七)	紙本着色	四五・八×五九・八	御物	前期
35	笠島―ちょうちょううお	一面	昭和四十二年(一九六七)	紙本着色	二二・八×二九・二	御物	後期
36	葉山の磯にて―たこ	一枚	昭和四十二年(一九六七)	紙本着色	三〇・〇×四五・六	御物	後期
37	迷鳥―やつがしら	一幅	昭和四十二年(一九六七)	紙本着色	二九・七×四四・八	御物	中期
38	後庭―西洋芙蓉	一面	昭和四十二年(一九六七)	紙本着色	五九・五×四五・三	御物	前期
39	麓の初夏―うわみずざくら	一枚	昭和四十二年(一九六七)	紙本着色	三〇・〇×四五・二	御物	後期
40	新秋―ぶどう	一面	昭和四十二年(一九六七)	紙本着色	三〇・二×四五・五	御物	前期
41	高原―くがいそう	一面	昭和四十三年(一九六八)	紙本着色	四五・五×三〇・〇	御物	後期
42	初秋―いちじく	一面	昭和四十三年(一九六八)	紙本着色	四六・〇×六〇・五	御物	後期
43	那須の山道―はくうんぼく	一面	昭和四十三年(一九六八)	紙本着色	九一・〇×六〇・〇	御物	後期
44	吹上の宵―あおばずく	一幅	昭和四十三年(一九六八)	紙本着色	四四・五×二九・一	御物	中期
45	葉山の海―こち、くらかけとらぎす	一面	昭和四十三年(一九六八)	紙本着色	四六・〇×六〇・五	御物	後期
46	磯の香り―かさご	一面	昭和四十四年(一九六九)	紙本着色	三〇・〇×四四・八	御物	後期
47	はぜ	一面	昭和四十二～四十四年頃	紙本着色	二二・二×二八・六	御物	後期
48	絵巻　葉山	一巻	昭和四十四年(一九六九)	紙本金彩	(絵)三〇・二×三六一・三 (和歌一～絵～和歌二までの長)四八六・七	御物	後期
49	春庭―こぶし、雉子	一面	昭和四十四年(一九六九)	紙本着色	八四・〇×五二・一	お手許品	中期
50	白の沈黙	一枚	昭和四十四年(一九六九)	紙本着色	三〇・〇×四五・〇	御物	後期
51	すっぽん	一面	昭和四十四年(一九六九)	紙本着色	四九・〇×五六・五	御物	前期

52	おおべにうちわ（アンセリウム）	一面	昭和四十四年（一九六九）	紙本着色	六〇・〇×九一・〇	御物	前期
53	晩夏―くがいそう	一面	昭和四十五年（一九七〇）	紙本着色	五九・五×四五・〇	御物	前期
54	旅の思い出―ジルの踊手（人形）	一面	昭和四十七年（一九七二）	紙本着色	八九・五×五九・五	御物	後期
55	秋立ちて―ぶどう	一幅	昭和四十七年（一九七二）	紙本着色	四四・二×五七・五	御物	中期
56	秋光―いちじく	一面	昭和四十七年（一九七二）	絹本着色	二七・〇×二四・〇	御物	中期
57	秋澄む―菊	一面	昭和四十八年（一九七三）	紙本着色	六〇・〇×四五・〇	御物	前期
58	伊豆にて―とけいそう	一面	昭和四十八年（一九七三）	紙本着色	四五・二×六〇・三	御物	後期
59	江浦―すずき	一面	昭和四十八年（一九七三）	紙本着色	六〇・〇×九〇・〇	御物	中期
60	熱帯の海―貝	一面	昭和五十一年（一九七六）	紙本着色	四五・五×六〇・二	御物	前期
61	つゆのころ―銀杏	一面	昭和五十二年（一九七七）	紙本着色	三〇・四×四五・五	御物	後期
62	須崎にて―はやとうり	一面	昭和五十三年（一九七八）	紙本着色	二九・八×四六・〇	御物	前期
63	伊豆の海―つのだし	一面	昭和五十六年（一九八一）	紙本着色	四一・六×五八・三	御物	後期

＜香淳皇后と画伯たち＞

64	高取稚成	色紙（童子奏楽・蛇篭図）	二枚	大正～昭和初期	絹本着色	各二七・二×二四・二	三の丸尚蔵館 中期
65		赤坂離宮御苑（春）	六曲一隻	昭和三年（一九二八）	紙本着色	一六六・五×三五六・二	三の丸尚蔵館 中期
66	川合玉堂	色紙（牛・兎図）	二枚	不詳	絹本着色	各二七・二×二四・二	三の丸尚蔵館 中期
67		杜若に白鷺	一幅	大正六年（一九一七）	絹本着色	一三三・一×五〇・〇	三の丸尚蔵館 中期
68		渓山晩晴	一幅	昭和十八年（一九四三）	紙本墨画	四一・七×六〇・二	三の丸尚蔵館 中期
69		風景図	二面	不詳	絹本着色	各三二・六×四二・五	三の丸尚蔵館 中期
70		風景図（深山渓谷）	一幅	不詳	紙本墨画	三二・五×三六・八	三の丸尚蔵館 中期
71		植樹祭	一巻	昭和二十三年（一九四八）	紙本着色	一九・二×二五六・三	三の丸尚蔵館 中期
72		植樹祭（桧図に和歌）	一枚	昭和二十三年（一九四八）	紙本着色	二九・九×四五・七	三の丸尚蔵館 中期
73		植樹祭（木瓜図に和歌）	一幅	昭和二十三年（一九四八）	紙本着色	二九・四×四四・六	三の丸尚蔵館 後期
74		植樹祭（木瓜図に和歌）	一枚	昭和二十三年（一九四八）	紙本着色	三〇・〇×四五・三	三の丸尚蔵館 中期
75		植樹祭（富士図に和歌）	一枚	昭和二十三年（一九四八）	紙本着色	二九・六×四五・三	三の丸尚蔵館 前期
76		若草（富士図に和歌）	一枚	昭和二十三年（一九四八）	紙本着色	二八・五×四二・三	三の丸尚蔵館 後期
77		立太子（菊花図に和歌）	一枚	昭和二十七年（一九五二）	紙本着色	三〇・〇×四四・七	三の丸尚蔵館 前期
78		立太子（松図に和歌）	一枚	昭和二十七年（一九五二）	紙本着色	三〇・〇×四五・二	三の丸尚蔵館 前期

79		「水声鳥語」習作	一枚	昭和二十年代	紙本着色	四二・五×六〇・二	三の丸尚蔵館 中期
80		「真鶴」習作	一枚	昭和二十年代	紙本着色	四五・六×六〇・五	三の丸尚蔵館 前期
81		吊花にジョウビタキ	一枚	昭和二十年代	紙本着色	四五・四×六〇・一	三の丸尚蔵館 中期
82		牡丹	一枚	昭和二十年代	紙本着色	四五・四×六〇・一	三の丸尚蔵館 前期
83		富士	一枚	昭和二十年代	紙本着色	四五・二×六〇・五	三の丸尚蔵館 中期
84	前田青邨	初雪	一幅	昭和三十六年(一九六一)	紙本着色	三七・二×四八・〇	用度課 後期
85		馬頭	一面	昭和四十六年(一九七一)	紙本着色	一七・〇×二三・八	三の丸尚蔵館 後期
86		樹木	一面	昭和四十年代	紙本着色	二八・三×四〇・六	三の丸尚蔵館 後期
87		富士	一面	昭和四十年代	紙本金地着色	二七・二×二四・一	三の丸尚蔵館 後期
88		あざみ(素描)	一面	昭和四十年代	紙、色鉛筆	二八・〇×三九・三	三の丸尚蔵館 後期
89	山口蓬春	桜図素描	一枚	昭和十六年頃か	紙本墨彩	五六・五×四二・〇	三の丸尚蔵館 前期
90		花菖蒲(素描)	一面	昭和二十年代中頃	紙、鉛筆、水彩	五五・二×七九・五	三の丸尚蔵館 後期
91		菊(素描)	一面	昭和二十年代～三十年代初	紙、鉛筆、水彩	五五・一×三九・三	三の丸尚蔵館 後期
92		秋意	一幅	昭和三十七年(一九六二)	紙本着色	九二・七×三六・二	用度課 後期
93	奥村土牛	山中湖より	一面	昭和五十三年(一九七八)	紙、鉛筆、水彩	六一・三×八五・〇	三の丸尚蔵館 後期
94		牡丹(素描)	一面	昭和五十三年(一九七八)	紙、鉛筆、色鉛筆	三七・二×四四・八	三の丸尚蔵館 後期
95		牡丹(素描)	一面	昭和四十年代～五十年代	紙、鉛筆、色鉛筆	三六・五×四四・六	三の丸尚蔵館 後期
96	跡見玉枝	桜図色紙	五枚	大正～昭和前期	絹本着色	各二七・二×二四・二	三の丸尚蔵館 前期
97		桜図屏風	二曲一隻	昭和七年(一九三二)	紙本着色	各一四八・八×六八・五	三の丸尚蔵館 前期
98	竹内栖鳳	雨霽	一幅	大正十三年(一九二四)	絹本着色	一三八・五×四二・三	三の丸尚蔵館 中期
99	横山大観	菊花	一幅	昭和三年(一九二八)	絹本着色	一五〇・五×五七・〇	三の丸尚蔵館 中期
100	上村松園	雪月花	三幅対	昭和十二年(一九三七)	絹本着色	各一五七・五×五四・二	三の丸尚蔵館 前期
101	西村五雲 西山翠嶂	朝陽群鶴・月下群鴎図	対幅	昭和三年(一九二八)	絹本着色	各五〇・七×一五九・〇	三の丸尚蔵館 前期
102	堂本印象	千代田城	一幅	昭和十四年(一九三九)	紙本着色	五三・四×五九・七	三の丸尚蔵館 中期
103	前田青邨 ほか	画帖「景雲餘彩」より	六図	大正十一年(一九二二)	絹本着色	各三二・〇×三九・〇	三の丸尚蔵館 後期
104	高取稚成 ほか	画帖「瑞彩」より	八図	大正十三年(一九二四)	絹本着色	各二八・五×四〇・五	三の丸尚蔵館 後期
105	奥村土牛 ほか	画帖「光彩」より	四図	昭和六十一年(一九八六)	紙本着色	各二六・八×三四・七	三の丸尚蔵館 後期

香淳皇后の御絵と画伯たち
三の丸尚蔵館展覧会図録No.43

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成十九年三月二十七日発行

© 2007, The Museum of the Imperial Collections

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

香淳皇后の御絵と画伯たち
三の丸尚蔵館展覧会図録No.43

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成十九年三月二十七日発行

© 2007, The Museum of the Imperial Collections

color on paper
29.4 × 44.6
Sannomaru Shōzōkan

74
Kawai Gyokudo
Tree Planting Ceremony
(Japanese Quince and Waka Poem)
1948
color on paper
30.0 × 45.3
Sannomaru Shōzōkan

75
Kawai Gyokudo
Tree Planting Ceremony
(Mt.Fuji and Waka Poem)
1948
color on paper
29.6 × 45.3
Sannomaru Shōzōkan

76
Young Grass (Mt.Fuji and Waka Poem)
1948
color on paper
28.5 × 42.3
Sannomaru Shōzōkan

77
Kawai Gyokudo
Investiture of the Crown Prince
(Chrysanthemum and Waka Poem)
1952
color on paper
30.0 × 44.7
Sannomaru Shōzōkan

78
Kawai Gyokudo
Investiture of the Crown Prince
(Pine and Waka Poem)
1952
color on paper
30.0 × 45.2
Sannomaru Shōzōkan

79
Kawai Gyokudo
Sound of Flowing Water and
Song of Birds (study)
late 1940's to early 1950's
color on paper
42.5 × 60.2
Sannomaru Shōzōkan

80
Kawai Gyokudo
Manazuru (study)
late 1940's to early 1950's
color on paper
45.6 × 60.5
Sannomaru Shōzōkan

81
Kawai Gyokudo
Daurian Redstart
and hanging flowers
late 1940's to early 1950's
color on paper
45.4 × 60.1
Sannomaru Shōzōkan

82
Kawai Gyokudo
Peony
late 1940's to early 1950's
color on paper
45.4 × 60.1
Sannomaru Shōzōkan

83
Kawai Gyokudo
Mt. Fuji
late 1940's to early 1950's
color on paper
45.2 × 60.5
Sannomaru Shōzōkan

84
Maeda Seison
First Snow
1961
color on paper
37.2 × 48.0
Supply Division

85
Maeda Seison
Head of a Horse
1971
color on paper
17.0 × 23.8
Sannomaru Shōzōkan

86
Maeda Seison
Trees
late 1960's to early 1970's
color on paper
28.3 × 40.6
Sannomaru Shōzōkan

87
Maeda Seison
Mt. Fuji
late 1960's to early 1970's
color on gold coated paper
27.2 × 24.1
Sannomaru Shōzōkan

88
Maeda Seison
Thistle (sketch)
late 1960's to early 1970's
colored pencil on paper
28.0 × 39.3
Sannomaru Shōzōkan

89
Yamaguchi Hoshun
Cherry Blossom (sketch)
around 1941
ink and color on paper
56.5 × 42.0
Sannomaru Shōzōkan

90
Yamaguchi Hoshun
Iris (sketch)
around 1945
pencil and water color on paper
55.2 × 79.5
Sannomaru Shōzōkan

91
Yamaguchi Hoshun
Chrysanthemum (sketch)
late 1940's to 1950's
pencil and water color on paper
55.1 × 39.3
Sannomaru Shōzōkan

92
Yamaguchi Hoshun
Autumn Air
1962
color on paper
92.7 × 36.2
Supply Division

93
Okumura Togyu
From Lake Yamanaka
1978
pencil and water color on paper
61.3 × 85.0
Sannomaru Shōzōkan

94
Okumura Togyu
Peony (sketch)
1978
pencil and colored pencil on
paper
37.2 × 44.8
Sannomaru Shōzōkan

95
Okumura Togyu
Peony (sketch)
late 1960's to early 1980's
pencil and colored pencil on
paper
36.5 × 44.6
Sannomaru Shōzōkan

96
Atomi Gyokushi
Cherry Blossoms on *shikishi* cards
Taisho to early Showa periods
color on silk
27.2 × 24.2 each
Sannomaru Shōzōkan

97
Atomi Gyokushi
Cherry Blossoms
1932
color on paper
148.8 × 68.5 each
Sannomaru Shōzōkan

98
Takeuchi Seiho
In the Mist after Rain
1924
color on silk
138.5 × 42.3
Sannomaru Shōzōkan

99
Yokoyama Taikan
Chrysanthemum
1928
color on silk
150.5 × 57.0
Sannomaru Shōzōkan

100
Uemura Shoen
Snow, Moon, and Flowers
1937
color on silk
157.5 × 54.2 each
Sannomaru Shōzōkan

101
Nishimura Goun, Nishiyama Suisho
Cranes in the Morning Sun,
Seagulls under the Moonlight
1928
color on silk
50.7 × 159.0 each
Sannomaru Shōzōkan

102
Domoto Insho
Chiyoda Palace
1939
color on paper
53.4 × 59.7
Sannomaru Shōzōkan

103
Maeda Seison, and others
From "Keiunyosai"(Felicitous
Clouds and Other Sketches of
Life)
1922
color on silk
32.0 × 39.0 each
Sannomaru Shōzōkan

104
Takatori Wakanari and others
From "Zuisai" (Fresh Colors)
1924
color on silk
28.5 × 40.5 each
Sannomaru Shōzōkan

105
Okumura Togyu and others
From "Kosai" (Luster)
1986
color on paper
26.8 × 34.7 each
Sannomaru Shōzōkan

1967
color on paper
59.5 × 45.3
Imperial Properties

39
Mountain Foot in Early Summer
– Japanese Bird Cherry
1967
color on paper
30.0 × 45.2
Imperial Properties

40
Early Autumn – Grapes
1967
color on paper
30.2 × 45.5
Imperial Properties

41
Plateau – Blackroot
1968
color on paper
45.5 × 30.0
Imperial Properties

42
Early Autumn – Fig
1968
color on paper
46.0 × 60.5
Imperial Properties

43
Mountain Road at Nasu
– Fragrant Snowbell
1968
color on paper
91.0 × 60.0
Imperial Properties

44
Early Evening at Fukiage – Brown Hawk Owl
1968
color on paper
44.5 × 29.1
Imperial Properties

45
Sea at Hayama
– Flathead, Grub Fish
1968
color on paper
46.0 × 60.5
Imperial Properties

46
Scent of the Shore – Scorpionfish
1969
color on paper
30.0 × 44.8
Imperial Properties

47
Goby
c.1967~1969
color on paper
22.2 × 28.6
Imperial Properties

48
Illustrated Scroll, Hayama
1969
gold on paper
(painting)30.2 × 361.3,
(length from *waka* poem 1～
painting～*waka* poem 2) 486.7
Imperial Properties

49
Spring Garden – Magnolia and Pheasant
1969
color on paper
84.0 × 52.1
Their Majesties' personal collection

50
White Silence
1969
color on paper
30.0 × 45.0
Imperial Properties

51
Soft Shelled Turtle
1969
color on paper
49.0 × 56.5
Imperial Properties

52
Anthurium
1969
color on paper
60.0 × 91.0
Imperial Properties

53
Late Summer – Blackroot
1970
color on paper
59.5 × 45.0
Imperial Properties

54
Memory of a Journey – Dancer of Jill (Doll)
1972
color on paper
89.5 × 59.5
Imperial Properties

55
Beginning of Autumn - Grapes
1972
color on paper
44.2 × 57.5
Imperial Properties

56
Autumn Light – Fig
1972
color on silk
27.0 × 24.0
Imperial Properties

57
Lucid Autumn – Chrysanthemum
1973
color on paper
60.0 × 45.0
Imperial Properties

58
In Izu – Passion Flower
1973
color on paper
45.2 × 60.3
Imperial Properties

59
Enoura – Sea Bass
1973
color on paper
60.0 × 90.0
Imperial Properties

60
Tropical Sea – Shell
1976
color on paper
45.5 × 60.2
Imperial Properties

61
During the Rainy Season – Ginkgo
1977
color on paper
30.4 × 45.5
Imperial Properties

62
At Suzaki – Chayote
1978
color on paper
29.8 × 46.0
Imperial Properties

63
Izu Sea – Moorish Idol
1981
color on paper
41.6 × 58.3
Imperial Properties

Empress Kojun and Intimate Master Painters

64
Takatori Wakanari
Shikishi cards
(Children Playing Instrument and Gabion)
Taisho to early Showa periods
color on silk
27.2 × 24.2 each
Sannomaru Shōzōkan

65
Takatori Wakanari
Garden of Akasaka Detatched Palace (Spring)
1928
color on paper
166.5 × 356.2
Sannomaru Shōzōkan

66
Kawai Gyokudo
Shikishi cards (Cow and Rabbit)
unknown period
color on silk
27.2 × 24.2 each
Sannomaru Shōzōkan

67
Kawai Gyokudo
Irises and White Egret
1917
color on silk
133.1 × 50.0
Sannomaru Shōzōkan

68
Kawai Gyokudo
Ravine and Mountain on a Clear Evening
1943
ink on paper
41.7 × 60.2
Sannomaru Shōzōkan

69
Kawai Gyokudo
Landscape
unknown period
color on silk
32.6 × 42.5 each
Sannomaru Shōzōkan

70
Kawai Gyokudo
Landscape (Deep Mountain and Ravine)
unknown period
ink on paper
32.5 × 36.8
Sannomaru Shōzōkan

71
Kawai Gyokudo
Tree Planting Ceremony
color on paper
19.2 × 256.3
Sannomaru Shōzōkan

72
Kawai Gyokudo
Tree Planting Ceremony
(Japanese Cypress and Waka Poem)
color on paper
29.9 × 45.7
Sannomaru Shōzōkan

73
Kawai Gyokudo
Tree Planting Ceremony
(Japanese Quince and Waka Poem)
1948

List of Exhibits

Empress Kojun's Paintings

1
Summer in Nasu – Fringed Orchids
1956
color on paper
18.0 × 50.2
Imperial Properties

2
Evergreen Magnolia
1956
color on paper
45.7 × 60.0
Imperial Properties

3
In the Rain – Tree Frog
1957
color on paper
45.5 × 59.1
Imperial Properties

4
Young Bamboo
1957
color on paper
46.2 × 30.6
Imperial Properties

5
Illustrated Scroll of Makurano Soshi
1957
color on silk
27.2 × 123.4
Imperial Properties

6
Double Cherry Blossoms
1958
color on silk
56.5 × 32.5
Imperial Properties

7
Draft Sketch of Double Cherry Blossoms
c.1958
ink on paper
61.0 × 39.0, 27.3 × 39.0
Sannomaru Shōzōkan

8
Kikuzakura
around c.1958
color on silk
59.0 × 34.3
Imperial Properties

9
Draft Sketch of Kikuzakura
around c.1958
ink on paper
52.5 × 42.3
Sannomaru Shōzōkan

10
White Birch, Spring in Asama
1960
color on paper
40.0 × 45.5
Their Majesties' personal collection

11
White Birch, Autumn in Asama
1960
color on paper
40.0 × 45.5
Their Majesties' personal collection

12
At Nigatogawa – Maple-leaf Fairy Candles
1960
color on paper
58.1 × 39.8
Imperial Properties

13
Arrowroot
1961
color on paper
52.0 × 69.0
Imperial Properties

14
Western Orchid
1962
color on paper
29.5 × 44.5
Imperial Properties

15
Waterfall at Nachi
1962
color on paper
30.6 × 45.6
Imperial Properties

16
Chars
1963
color on paper
29.3 × 44.8
Imperial Properties

17
Mountain Hawk
1963
color on paper
43.4 × 60.0
Imperial Properties

18
Spring Snow in the Imperial Garden
1963
color on paper
33.0 × 24.0
Imperial Properties

19
Passing Spring
1963
color on paper
29.3 × 45.0
Imperial Properties

20
Shishi-odori Dance
1963
color on paper
45.2 × 30.0
Imperial Properties

21
River Fish – Oikawa
1964
color on paper
28.2 × 40.6
Imperial Properties

22
At Hayama – Conger Eel
1964
color on paper
30.1 × 44.6
Imperial Properties

23
Dragon
1965
ink and color on paper
81.2 × 57.9
Imperial Properties

24
Japanese Wineberry
1965
color on paper
29.7 × 45.5
Imperial Properties

25
Early Spring at Hayama – Pussy Willow
1965
color on paper
47.9 × 53.6
Imperial Properties

26
Summer Day at Hayama – Crabs
1966
color on paper
30.0 × 45.2
Imperial Properties

27
Prawns
1966
color on paper
44.5 × 59.0
Imperial Properties

28
Eastern Orchids
1966
color on paper
29.9 × 44.6
Imperial Properties

29
At Dokanbori – Kingfisher
1966
color on paper
30.1 × 22.4
Imperial Properties

30
Wild Birds – Japanese Tits
1966
color on paper
45.2 × 30.3
Imperial Properties

31
Beyond the Ocean – Mt.Fuji
1966
color on paper
27.0 × 24.0
Imperial Properties

32
Northern Sea – Salmon
1967
color on paper
60.0 × 90.5
Imperial Properties

33
Still Life – Champagne Crab
1967
color on paper
44.5 × 64.5
Imperial Properties

34
By the Nakagawa – Rainbow Trouts
1967
color on paper
45.8 × 59.8
Imperial Properties

35
Kasajima – Butterflyfish
1967
color on paper
22.8 × 29.2
Imperial Properties

36
At Hayama Beach – Octopuses
1967
color on paper
30.0 × 45.6
Imperial Properties

37
Feathered Visitors – Hoopoes
1967
color on paper
29.7 × 44.8
Imperial Properties

38
Back Garden – Western Cotton Roses

Paintings by Empress Kojun

Empress Kojun was born as the eldest daughter of Prince Kuni Kuniyoshi and Princess Chikako, and was named Nagako. She married Prince Hirohito (the later Emperor Showa) on January 26th, 1924, and after enjoying longevity of 97 years, she passed away on June 16th, 2000.

Empress Kojun was talented in various fields such as sports, music, *waka* poems, etc., but especially showed outstanding talent in Nihonga(Japanese painting). Empress Kojun's earnest study of Nihonga began under the Yamotoe painter Takatori Wakanari(1868-1935), when she was engaged. However, after her marriage, her children were born one after another, and during this busy time as the Empress, Wakanari met an untimely death in 1935. She probably did not study painting during this period. She resumed painting study in 1944, under the guidance of Kawai Gyokudo(1873-1957). However, soon after, the world situation became worse. After the end of the World War in August, 1945, her duty as the Empress became quite busy, forcing her to discontinue her painting study once again. This study was probably resumed around the 1950's. However, because Gyokudo resided in Okutama at the time, the chamberlain would bring the Empress's paintings to Gyokudo's residence to receive criticism. Gyokudo did not paint copying examples, and always claimed that the only model is nature, but he passed away in June, 1957. According to Gyokudo's late year recommendation, Maeda Seison(1885-1977) became the next teacher of the Empress. Seison also made strict criticize, and also did not instruct to copy examples. Sometimes strict and sometimes with praise, he guided Empress Kojun so that she herself could reached her own state of paintings within her repeated contrivance. As a result, Seison commented that he always felt that Empress Kojun's paintings are dignified, generous, untroubled and she is always tackling to try to depict her subject's appearance. Furthermore, many people highly praise the elegance and warmth in her paintings. Empress Kojun was the most enthusiastic in painting during the period that she studied under Maeda Seison, coming to the ripening stage. Even after she impaired her lumbar vertebra in 1977, and her health worsened, her enthusiasm did not decline, though her lines did become weaker.

Empress Kojun's paintings were published in three books of paintings, and also were exhibited in Tokyo, Kyoto and Aichi from 1973 to 1975. When she visited the U.S.A in 1975, they were exhibited along with old art works in Washington and New York, and gained public favor.

Empress Kojun studied hard under these three painters, but was also influenced by other painters. Especially, Yamaguchi Hoshun(1893-1971) was one of them who showed her the importance and appeal of sketching, and Okumura Togyu(1889-1990) was the painter who told her about sketching after her health weakened.

There are few people who know about Empress Kojun's painting now, and we must rely on documents of the time to find out about it. Among them, the diary of Irie Sukemasa (1905~1985), who served Emperor Showa for a half century from 1934 to 1985 as a chamberlain, and Grand Chamberlain as his last post, is valuable. Furthermore, Irie Sukemasa has referred to Empress Kojun's paintings in many of his essays. In this exhibition, we introduce Empress Kojun's paintings including 3 borrowed from Their Majesties the Emperor and Empress, and the paintings by masters that Empress Kojun kept close by. Based on accounts in material such as Irie Sukemasa's diary, we can consider about her relationship with the master painters looking into the background of Empress Kojun's paintings, and perceive her attitude and humaneness in creating her own paintings always earnestly facing her teachers and paintings within warm exchange with them.

Foreword

Empress Kojun studied Nihonga (Japanese painting) under Nihonga painters such as Takatori Wakanari(1867-1935), Kawai Gyokudo(1873-1957), and Maeda Seison(1885-1977), and has created many paintings. She learned basic Yamatoe techniques from Takatori Wakanari especially since she was a member of the late Prince Kuni family (Kuninomiya) before she joined the Imperial family. She studied under Kawai Gyokudo since the 1940's, from whom she learned much about depiction of nature. From 1959, she widened her variety of paintings according to Maeda Seison's frank opinions. Many people remark that Empress Kojun's paintings naturally show dignity and benevolence. Furthermore, the warmth and charm which can be seen in many of her paintings show how much she enjoyed painting.

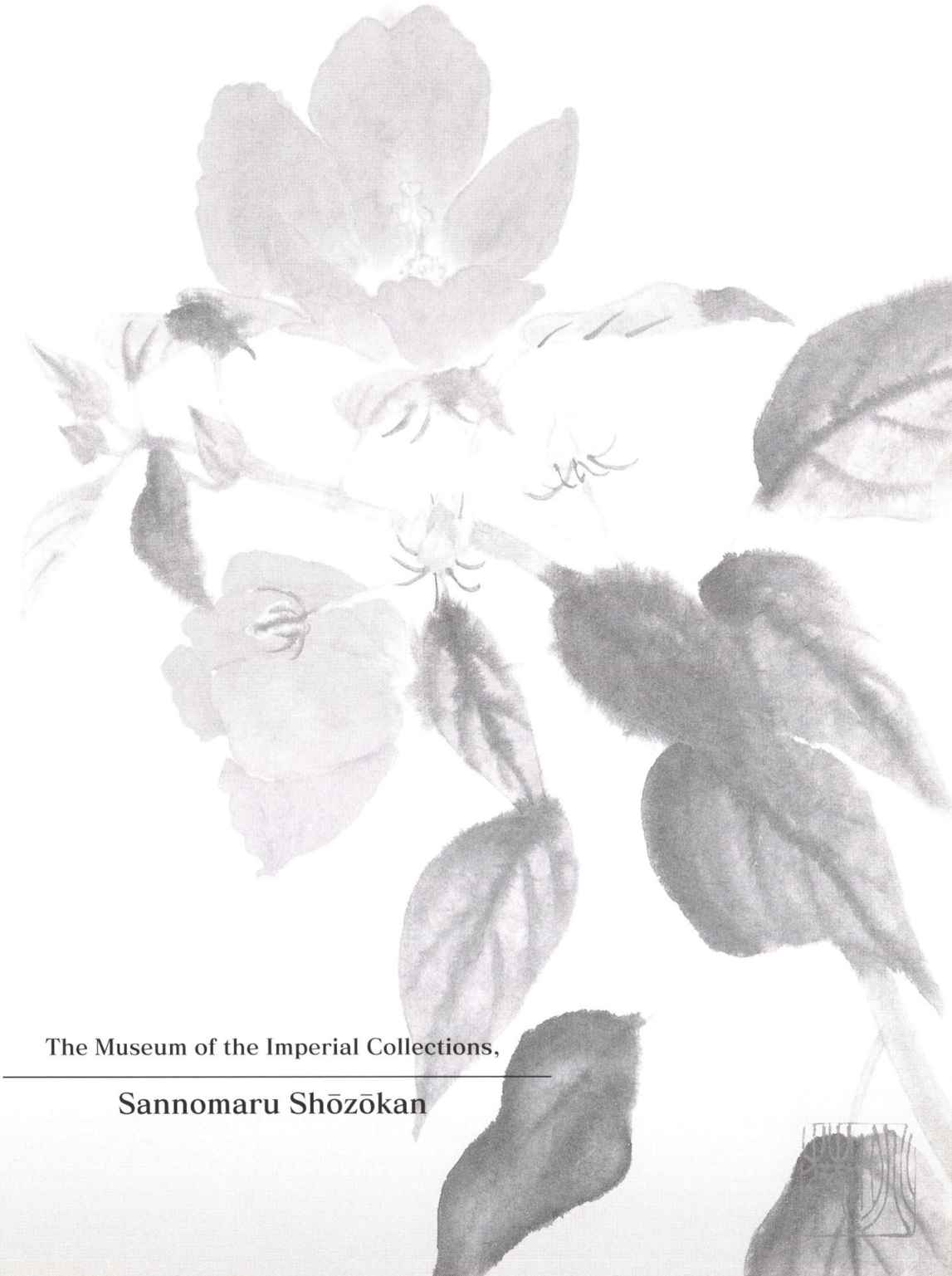
In this exhibition, along with Empress Kojun's paintings, we will exhibit the paintings by the masters she studied under which she kept close by, and also introduce about her intimacy with other master painters. We hope our visitors can perceive a part of the warm exchange between Empress Kojun and the masters, and also how she enjoyed painting.

March, 2007

The Museum of the Imperial Collections,
Sannomaru Shōzōkan

Paintings by Empress Kojun and Intimate Master Painters Around Her

March 27 (Tue.) — June 17 (Sun.), 2007



The Museum of the Imperial Collections,

Sannomaru Shōzōkan